

人商のスニエ

291
150



特

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



特109
956



H

解題

沙翁學者として知られたる孫内道遙博士の説によれば、本書は一五九四年乃至一五九八年頃の創作で、沙翁第一期の喜劇であると云ふ。

本書は、一篇の骨子とせる人肉抵當及、ホオシヤ姫と其書記の扮装を、兩人の良人たる人々が最後まで氣附さりしなど、甚だしく不自然の作意なきにあらざれど、充分に喜劇の本領を發揮せるものとして、沙翁の喜劇中傑作の一として知られて居る事は、言ふを須ない所である、殊に人物の性格描寫に至りては、驚くべき寫實的描寫を行ひ、事件の發展又沙翁一流の虚實皮膜の間を縫ひ行くが如き、些の被綻だに見るを得ずとは、又道遙博士の説く所である、要するに本書が沙翁劇中に於ける傑作の一として本叢書の一に收めざるを得ざるは、以上の理由だけを以てするも充分である。



尤も沙翁の本劇作以前、已に人肉抵當に關する物語としてはフイオレンチノの The adventure of Giannetto あり、三個の函に關する物語としては、H. Hoesta Romanum ありと雖も、是れ偶々沙翁が是等にヒントを得たと云ふに過すして、毫も本書が、他人の作意を借りて、大をなすに至つたと云ふ理由にはならぬ、兎に角、「人肉裁判」の一篇は稀代の巨匠沙翁の手によりて、初めて世界の大文學として認めらるゝに至つたのである。

元來吾々が沙翁劇を紹介せんなどは、少々生意氣なる計畫なりと雖も、其の梗概なりとも本叢書に收め度しと思ひ立ち、終に譯者をして、原書の外に Helin von Gohlegel の獨譯本などを参照せしめ、本書を成すに至らしめた。

元來、監修者の希望としては、全文を譯載し得れば、此上結構なる事はなしと思ひしかど、如何にせん、紙數に限りあるを以て、茲には第一幕より第三幕に至る間を、小説體に抄譯し、第四と第五の二幕は殆ど全部收めしめた、若し幸

にして讀者に、沙翁の片影な、と傳ふるを得ば、譯者及監修者の満足である。

監修者 守田有秋

ヴエニスの商人（人肉抵當裁判）

セーキスピニア作
杉本繁夫譯

發端

今は昔、伊太利はヴエニスの府に、アントニオと呼ぶ實直で富有な商人があつた、常に多くの持船をツリボリス、墨西哥、英吉利、リスボン、印度などへ往航して、盛んに貿易をさして居たが、此の人、商人に似氣なく俠氣ある人で、友人や知己などの中に資金を用立て、呉れと頼むものがあれば、抵當も利息も取らず、快く金を貸與へるので、同じ市に、高利貸當世をして居る猶太人の中には、密にアントニオの行爲を心悪く思ふものもあつた。

此處に、同じヴエニスの市にシャイロツクと呼ぶ猶太人の高利貸があつた、

此の男、日頃よりアントニオの富を嫉み、又其の行爲を快からず思つて居たが、何時か機會さへあらば、アントニオを苦しめ、日頃の鬱憤を晴してやらんと、絶えず心を配つて居た。

然るに、アントニオの友にバツサニオと呼ぶ青年があつて、豫てよりベルモントの富有なる女主人、ボオシヤ姫と云ふに懸想し、此の姫の許に求婚者として行くべき旅費、其他雑用として三千兩の金を、親友なるアントニオに貸與され度しと申し込んだ、所が其時、恰度折悪しくも、アントニオの持船は悉く航海中であつた爲め、彼れにはバツサニオに用立つべき現金の持合せがなかつた、其處で彼は、止むなく右の金子を一時市の高利貸シヤイロツクに借用して、之をバツサニオに融通してやることになる。

所が、シヤイロツクの方では、豫てより自分の商賣に防害を加へて居るアントニオを苦しめて、日頃の腹意せをして遣らんものと、手ぐすね引いて機會を

待つて居たことゝて、二つ返事で金を用立てることになる、是が本篇の人肉抵當裁判てふ珍無類の訴訟事件を起し、ヴェニス公國を騒がす原因となる、——物語は先づバツサニオとアントニオの會見に始まる。

第一幕

第一場

今しもヴェニスの街を、アントニオが、物思はし氣な様子をして歩いて居ると、恰度友達のバツサニオに出遭つた。

「お、長い所で遇つた、……君、今日は是非とも僕に例の婦人の事を話してくれ給へ、そら、君が内々御參詣し度いと言つて居た婦人の事を、——今日話すと云ふ約束だつたぢやないか」

「アントニオ君、君が御承知の通り、僕は收入以上の不相應な生活をした爲

めに、財産を全然無くして了つたのだ、で、僕は何うしたら自分の負債を済すことが出来るかと、それを心配して居るんだ、君、僕は、君に金銭上に於ても、亦友人としての情誼に於ても負ふて居るが、君の情誼を信じて、僕は負債償却に關する僕の計畫を總て君に打明けるつもりだ」

『いやバツサニオ君、何うかそれを打明けて呉れ給へ、不名誉でない限りは、僕の財産をも、一身をも賭して君のために計らうよ』

『僕は既にこれまでも君に御迷惑を掛けて居るが、今度こそは大丈夫成功する、然し失敗したら、前の方の金に對しては、感謝して負債者にならうよ』

『いや、那樣な事を言つて僕の氣を引くのは甚だ失敬だ、僕は君のために全力を盡す心算なんだから、一體君のために何うしたら可いのか、それを言つて呉れ給へ』

『實はアントニオ君、ベルモントに大層な遺産を持つて居る一人の姫御察が

あるのだ、非常な美人でね、「美」と云ふ言葉だけでは逆も言盡されない程の美人だ、そして、又、驚くべき才徳を備えて居る、僕は何時か其の婦人の眼から、色よい無言の音信を得て居るのだ、女の名はポオシヤと云つてね、アルータスの妻のポオシヤにも、劣らない程の婦人だ、だから、其の評判は世界に廣まつて、今では諸方の國々から、有名な求婚者がやつて來るのだ、……これえ、アントニオ君、僕に若し資力さへあつて、彼等と同じ競争者になる事が出来るならば、成功は疑ひないと心に信じて居るが——』

『君の知つて居る通り、僕の財産と言つては、全部海にあるんだから、即座に用立つものと言つては、金もなければ品物もない、だからさ、まア出かけて行つて、僕の信用が何の位役にたつかわつて見やう、そして出来るだけの算段をした上で、君をベルモントの美しいポオシヤ姫の所へ遣るとしやう、さ、これから何處へでも行つて、金を貸し相な男を探して見給へ、信用づく

でも、友誼づくでも、それは僕に取つて何ちらでも可い。』
二人は打連れ立つて行く。

第二場

ベルモントのボオシヤと云ふは、さる富有な大家の姫君で、両親に死別して後は、莫大な遺産を譲り受け、數多の僕や召使ひにかしづかれて、面白可笑しく日を送つては居るが、然し、齡頃に成て居るにも拘らず、今だに結婚もしないで居る、と云ふのは、父の遺言により、ボオシヤ姫の結婚には一つの條件が付けられてあるからだ。

其は次の様な條件である。

ボオシヤ姫の父なる人は、其の臨終に際し、金、銀、鉛の三つの匣をボオシ

ヤ姫に渡し、若し、姫に求婚する男の中で、其の三つの匣の一つを撰び、運よく父の本意を當てる人があれば、其の人こそ婿にすべき人であると、言ひ置いて死んだ。

此の思ひ附は結構な事には相違なかつたけれど、然しボオシヤ姫に取つては、可なり苦痛な事であつた。何故と云へば、ボオシヤは、三つの匣の中の一つを當て得る人のある迄は、好きな人を撰ぶことも出来なければ、厭な人を拒む事も出来ないで、飽までも自分の意志は、死せる父の遺言に制限されて居なければならなかつたのである。

今日も今日とて六人の求婚者に應接して居たボオシヤ姫は、世の中の事が、總て自分の意の儘にならないので、つくづく浮世が飽々したと言つて、腰元のネリツサと云ふに、咳して居る、けれども、これ等の求婚者は、一人もボオシヤの氣に入つたものはなく、何れも早く歸つて呉れれば可いと思つて居る、唯

だ父の存生中に、モントアラットの侯爵と一緒に来たヴェニス軍人で、バツサニオと云ふ人は、曾て見たこともない立派な殿御であると、ポオシヤも思ひネリツサも信じて居る、けれども厭な人許りが求婚に来て、中々爾う云ふ人はやつて来ない。

兩個の話して居る所へ、家來の一人が来て、六人の殿方が、お暇乞をなさうとしてお待兼ねで御座います、それから、七番目のモロツコの殿様のお先觸れがお着になつたと注進して行く、するとポオシヤは、

「やつと一人送り出したと思へば、またすぐ訪問がある」と言つて、咳しながら、ネリツサを連れて迎へに出て行く。

第三場

ヴェニス市中、何處へなりと行つて、僕の信用で金を借り給へと、親友のアントニオから言はれたバツサニオは、今しも街で遇つた猶太人の高利貸シヤイロツと、金の事で談判をして居る。

「三千兩。——なるほど」とシヤイロツクが言へば、「君、三ヶ月間だけぢや」とバツサニオが言ふ。

「三ヶ月間、——なるほど」

「今も言ふ通り、それに就てはアントニオ君が責任を負ふのだ」

「アントニオさんが責任を負ふ、——なるほど」

「借して呉れますか。え、聽いて呉れますか、返事を聽かして呉れ給へ」

「三千兩を三ヶ月間、そしてアントニオさんが義務を払ふ」

「さ、返辭を聞かして呉れ給へ」

「アントニオさんなら實に立派な人だ」

『立派でないと言ふやうな、反對の評判を聞きましたかれ』

『何うして、何うして、俺があの人を立派な人ぢやと言ふたのは、あの仁な
ら、充分な信用が置けると云ふ意味なのぢや、けれども、あの仁の財産は、
現前にあると云ふ譯ぢやない。あの人の持船は、ツリボリスに行つて居る、
他一艘は印度に行つて居る、それから市場で聞けば、三艘目はメキシコへ行
つて居り、四艘目は英吉利へ行つて居る、其外幾隻も出して居なると云ふ
ことぢやが、然し船は唯だ板子、水夫は唯だ人間ぢや御はせんか、それに、
陸の鼠もあれば、海の鼠もある、陸の盜賊もあれば、海の盜賊もある、……
つまり、海賊のことさ。且に、波や、風や、暗礁などの危険もあるだらうし、
——だが、あの人ならば心配は御はすまい、三千兩——あの人ならばお貸
し申ませうよ』

『そりや、大丈夫請合だよ』

『大丈夫で御はせう、大丈夫にし度いから、俺はよく考へて見やうと云ふの
ぢや、兎に角、アントニオさんに、遇つてお話しすることは出来んぢやらう
か、——や、誰れだ、やつて来たのは？』

『あれはアントニオぢや』

シヤイロツクは、傍を向いで、さも憎々しげに、

『何うだ、宛然阿諛を使つてる取税吏と云つたやうな態だ、俺は彼奴が耶蘇
信者だから大嫌ひなんだ、殊に奴め、薄馬鹿根性から、無報酬でもつて人に
金を借して、ヴェニス利息割を狂はせやがるから、一段と憎いわ、機會さ
へあれば、屹度怨みを晴して呉れる、奴め、商人の多數集つて居る場所で、
俺の商賣の事を悪口したり、俺が儲けた利息の事を高利だなどと言ひくさる、
彼様奴を許して置いては、俺の同種族は罰當りぢや！』

『おい、シヤイロツク』

「今、手許にある金を勘定して居ります、だが、胸算して見ても、何うも三千兩にはなり相も御はせん、だが、俺の仲間のチューバルが、調べて呉れるで御はせう、えゝと、何ヶ月と言はしやりましたな……」
「これに御機嫌よろしう、旦那、今も今とて、貴下のお噂をしまして居た所でござす」

「シャイロツク、私は、餘分のもを遣つたり取つたりする借金は仕ない流儀ぢやが、友達のために、これまでの慣例を破るのぢや——、ねえ、パツサニオ君、幾許ばかり借り度いと言つたんだね」

「へい、へい、それは三千兩」

「三ヶ月間」

「爾う爾う、忘れて居りました、三ヶ月間——と被仰つた。あ、それから」

文を。——いや、貴下は、利子を取つて貸し借りは仕ないと被仰りましたな」

「私は利息を取つて貸したことは、ついでない」

「ヤコブが叔父のラベンの羊を番をして居た時分に、條文や斑點の仔羊が生れたら、それは骨折料に、叔父から貰ふ筈にしたが、交尾んで居る牝羊の目の前に、木の枝の皮を剥いて突押しして置くと、其時孕んで産れた仔が、何れもこれも、斑であつたので、それが皆なヤコブのものになりました、これは決して盗賊ぢや御座せん、盗まないで儲けるのならば、それは自分の福徳と云ふもので——」

「ヤコブの仕たことは、一種の冒險だ、神の力でなすつたことだ、恚う云ふ事があるから、利息を取つて可いと云ふのか、金銭も、羊の仔も同じだと云ふのか」

アントニオの言葉は針のやうだ、シャイロツクは、

「そりや、何うだか知りませんが、兎に角、俺は金に兒を産ませますんぢや……まア、聴かつしやい……」

アントニオは、パツサニオに向ひ、

「ねえパツサニオ君、悪魔も、自分の目的を果すためには、人並みに聖書を引合に出すねえ、悪魔が聖書を引張り出すのは、恰度、悪漢が、笑顔を作つてるやうなものだ、見かけの良い林檎の心が腐つてるやうなもの……」

「けれどもシヤイロツクはそれを耳にもかけず、獨語のやうに、」

「三千兩と言へば大金だ、それを十二月から三月とすると、割合が、かうつと——」

彼れは頻りと胸算をして居る。アントニオは、

「おい、シヤイロツク、私の靴みを聴いて呉れるかね」

「アントニオ旦那、貴下は市場で、俺の貸金や利子の事で幾度となく悪口

を言ひなすつた、けれども俺は、肩を揺ぶりながら、静と辛抱して居りましたぢや、苦勞をするのは、俺等の仲間の運命だと思つて居ります、貴下は俺を邪教信者だの、病犬だのと呼んで、俺の上着の上に唾をかけなすつた——俺が俺の物を利用したのが悪いと云ふてな。所が、今になつて、貴下は俺に御用がおりぢやと云ふて、俺の所へ来て「これ、シヤイロツク、金を借してくれ」と、恚う言はつしやる、俺の髯に唾をひツかけ、野良犬を扉口から蹴飛ばすやうに、俺を蹴り飛ばしなすつた貴下が、俺に金を用立ると言つしやる、俺は何と言つて返辭をしませう、俺は恚んな風に言ひませうかね、へん、犬にお金がありますかい？ 犬が三千兩を御用立て出来ませうかい？——それとも、俺は腰は屈めて、奴隸のやうに呼吸を細くして、低聲で、恚んなに言ひませうか、旦那様、貴下様は、前の水曜日には、俺に唾を吐かけて下すつた、何時、何時は、俺を足蹴にして下すつて、又何時ぞや俺を犬と

お呼び下すつた、其の御恩顧に報いますために、これこれのお金を御用立て
申しませうと？」

『いや、今後とも、私はお前を犬だと云ふかも知れん、唾を吐き掛るかも知れん、足蹴にするかも知れん。けれども、若しお前が金を貸して呉れる氣なら、親切づくでなく借して呉れるが可い、若し、親切づくで貸して呉れるなら、利息を取るなんて法はないから。だから、それよりも敵に貸すつもりで借して呉れ、若し爾うなら、違約した場合には、公然に料金が取り立てられるではないか』

『まあ、爾う腹を立てなさるな、俺は貴下に友達になつて、可愛がつて貰い度いのぢや、貴下にかゝされた耻も忘れて、當座の金を御用立てる許りぢやない、無一文の利息も受けまいと云ふのぢや、それぢやに、貴下は聽つしやらぬ、……俺は親切で貸さうと言つて居るに——』

『成程、爾う云ふのは親切かも知れん』と、バツサニオが口を容れる。

『その親切の證據をお目にかけてませう、俺と一緒に登記所へ御座らつしやい、そして、一判で可えから判をして下されい、それも戯談にぢや、——何時の何日、何處何處の場所、これ、この金高を返済することが出来なかつたら、貴下の奇麗な肉を一ポンド、貴下の體の何處から切り取つても異存はないと云ふ證文にな——』

『よろしい、其の證文に判を押ませう、そして、あゝ猶太人も中々親切だわいと言はうよ』

それを聞いたバツサニオは眉を蹙めて、

『いや、僕のために、那樣な證文に判をしちや困るよ、君、僕は止むを得ないと思つて諦めやうから——』

『何に、君、心配するな、僕は期限を切らすやうな事はない、此の二月以内

に、つまり證文より一月前に、此の證文の金高よりも九倍の收入がある筈だ」
シヤイロツクはバツサニオに向ひ、

『もし、貴下、たとへ此の方が期限を切らしたからと言つて、俺が其料金を
取り立て、何になりますか、人肉を一ポンド取立てて見た所で、羊や牛や
山羊の肉だけの値もなければ、儲けにもなりはしません、唯だ俺は、これか
ら後に、御晶屑に預り度い許りに親切な盛さうと云ふので御座す、ちやから
さ、親切を受けて下されば可し、下さらなければ、——さやうなら、何うか
俺の親切氣を思ふて、餘り悪う取つて下さらんやうにな——』

『よろしい、證文に判をしやう』

『それでは登記所でお目にかゝるとしませう、此の面白い證文の書方を御指
圖して下されい、俺は歸て直ぐと金を拵へて來ますぢや、いづれ後刻一緒に
なりますわい』

『急いで行て來なさい』

シヤイロツクは行つて了ふ。

『れえ君、あの猶太人も、何うやら基督信者になり相だな』とアントニオが
言へば、

『けれども口先の親切でも、腹の黒い奴があるかられ』

『さ、行かう、心配することはない、私の船が期日より一ヶ月前に歸て來
るかられ』
二人は連れ立つて行く。

第二幕

第一場

アントニオの親友パッサニオは、ベルモントのボオシヤ姫の許に求婚に行かうと思つて下僕に其の準備を命じて居ると、其處へグレッツシヤノと云ふ友達が出来て、今度のベルモント行には是非一緒に連れてつて呉れと云ふ、するとパッサニオは、

『ぢや詮方がない、一緒に行くさ、だがグレッツシヤノ君、君に言つて置く事がある、君は餘り無作法で、亂暴で、厚顔過るよ、無邪氣なのは君の持前なんだから、僕はそれを疵だとは言はないけれど、君の性質を知らないものは、何んなに放埒に思ふかも知れない、何うか君の其の陽氣な性質に、溫和と云ふ浴たい水を滴して、氣分を静めて貰い度い、さもないと、僕までが誤解を受けて、望を失ふやうな事がないとも限らない。』

『パッサニオ君、まあ聞いて呉れ給へ、僕は誓つて、嚴肅な態度を装ひ、鄭

重に言を言ふよ、僕はポケットの中に聖書を入れて行くよ、そして嚴肅な顔をして居るよ、それからお祈りが始まる時も、帽子で眼を隠して溜息をしてアーメンと云ふよ、一切世間の禮式通りにね』
『ぢや、兎に角君の行るのを拜見しやう』
『だが、今夜は例外だよ』
『可いとも、今夜は大に浮れなくちやならぬ、ぢや少し用があるから僕は失敬するよ』
『僕は友達のロレンツの連中と一緒に行かなきゃならんから——』
二人は其處で別れて、グレッツシヤノは友達を探しに行く。

第二場

グレシヤノの友達、ロレンゾと云ふは、豫てより、猶太人の高利貸シヤイロツクの娘ジエシカと云ふに思をかけて居る、恰度其夜バツサニオが催す筈の宴會では、皆の者が假装をやる積に仕て居るが、ロレンゾはジエシカして、自分の仲間のやうにして、連れ出そうと企んで居る。

かくて、ロレンゾは、グレシヤノ外一名の友達と一緒に、シヤイロツクの留守中を見計らひ、ジエシカを待童の姿に假装さして連れ出して了ふ。

さて其の夜、宴果て、後、バツサニオは友人のグレシヤノを連れて船に乗込み、ベルモントのポオシヤ姫の許をさして出發することになる。

さて、愈バツサニオの船が出やうとすると、アントニオは其處まで見送つて来て、

「バツサニオ君、何も私のために仕事を中途半端にする事はないよ、充分に緩會の熱するのを待つが可い、猶太人に渡した證文なんかは、君の戀とは別

問題なんだから、思ひ切り心を陽氣にして、先方の氣に入るやうにして、成功して歸り給へ」

爾う言つてる間も、アントニオの眼は涙で一ぱいになつたので、彼れは顔をそむけて、後向に手を出して、バツサニオと握手して別れた、アントニオは、

バツサニオのやうな親友があればこそ、此の世の中も活き甲斐があるものゝやうに思つて居る。

同じ其の夜の事である、シヤイロツクが家に歸て見ると、自分の娘のジエシカが居ない、いや、ジエシカは兎に角、彼れはジエシカに持て行かれた金貨や財布が惜しくつて堪らないのである。

娘は、必定墮落ちしたに相違ないと思つて、シヤイロツクは狂氣のやうに街中を叫きながら探し歩いた。

「娘めやい！ おいらの大事な金貨やアい！ おいらの大事な娘が耶蘇信者と駈落しくさつた！ 裁判して呉れ！ 法律はないのか！ 俺の金貨を！ おれの娘を！ 封印して置いた財布を娘に取られて了つた、それから二つの寶石を、結構な寶石を娘の奴に渡はれて行つて了つた！ 裁判して下さい！ 裁判して下さい！」

ヴェニスの中を、恚んなに叫びたて、シャイロツクは歩いたが、終に役人に頼んで、パツサニオの船を検査して貰うまでに仕た、けれども、役人をつれて来た時は、もうパツサニオの船が出て行つた後であつた。

其の間にロレンゾとジェシカは外の遊山船に乗つて、巧くヴェニスの都を逃げ出して了つたのである。

第三場

ベルモントのボオシヤ姫の所へは、モロツコの君が求婚に来たけれど、例の三個の匣の中で、ボオシヤ姫の肖像が入れてあると云ふ匣をよう當てないで失敗して歸て了ふ。

其の後へ、又もやアラゴンの君が求婚に来て、これも銀の匣を當て、失敗して歸て行く、すると恰度其處へ家來が來て言ふ、

「お姫さま、御門前へ、唯今若いヴェニスの方が、馬でお着きになりました、それは御主人のお着きになる前知せにお越しなされたので、御鄭重な口上の外に、種々高價な贈物を持つてお越しになりました。如何にも戀の使ひと言つたやうな、恚んなお使者を、手前はついぞこれまでに見た事がありません」
それを聞いた腰元ネリツサは、

「どうかそれがパツサニオ様であればいゝに」

と、獨り語のやうに言ふ。

第三幕

第一場

自分の一人娘が莫大な金や寶石を持って、日頃敵のやうに思つて居る耶蘇信者と墮落したと云ふので、シヤイロツクは業が煮えて堪らない。

其處へアントニオの友達のサラリノと云ふ男が来て、種々と立話をした末、

「おい爺さん、アントニオが海で損をしたとか仕ないとか云ふ話だが、那樣噂を聞かなかつたかい」と尋く、するとシヤイロツクは、

「彼奴め、近頃は市場へも面出をよう仕くさん、つい先達までは、めかし込んで市場へ來居つた乞食野郎めが！ 畜生、俺の證文を覚えて居るか！」

彼奴め、始終俺を高利貸だと言つて悪口仕くさつた！ 彼奴め、いつも耶蘇信者の慈悲心を説きたて、無報酬で金を貸し肩つた、畜生め、あの證文を忘れるな！」

「だがね、よしんば返済の期限が切れたからと言つて、お前さん、あの男の肉を取りやしまいいれ、取つたつて何にもなりや仕ないからね」

「魚を釣る餌になるわい、腹の足しにはならんでも、腹癒の足しにはなる、彼奴め、俺に耻を搔せて、五千萬圓からの損をさせ居つた、俺が損をすれば笑ひくさる、得をすれば嘲弄しくさる、おれの國のものを馬鹿にしやがるし、おれの商賣の邪覺を入れるし、おれの友達には水をさし、おれの敵を煽て居つた、何故那樣ことを仕居つたかと云ふに、皆んな俺が猶太人だつたからだ、——猶太人には眼がないのか、手ががないのか、四肢五體、感覺、好悪の感情、情慾はないのか、猶太人は、耶蘇信者と同じ食べ物を食べないのか、同じ双

アントニオの親友パッサニオは、グレシヤノと一緒に、メルモットのポオシヤ姫の所へ着いた、そして、愈々三つの匣の中の一つを開て、ポオシヤを妻に得るか得ないかの運試しを仕やうとかつて居る。ポオシヤの傍にはネリツサ、パッサニオの傍にはグレシヤノが、何れも心配相な顔をして居る、その外にも部屋には、ポオシヤの附添ひのものが數多居る。

ポオシヤはパッサニオに向ひ、

第二場

お前役人を備つて置いて呉れ、期限がきれたら、彼奴の心の臓を取つてくれ、本統に彼奴がヴェニスに居なきや、俺は何んな商賣でも出来る、さ、チユーバル、行かう、何れ祈禱會で遇うとしやう』

物で怪我をしないのか、同じ病氣に罹らないのか、同じ療治で癒らないのか、夏や冬の同じ暑さ寒さを感じないのか？ 休等でも、針で突つたりや血が出るわい、穿ぐられりや笑はずに居られるかい？ 毒を飲まされて死なずに居られやうかい、馬鹿にされて仕返しをせずに居られやうかい、——他の事がお前方と同じならば、それもお前方と似て居さうなものだ。若し猶太人が耶蘇信を信したならば、其の謙遜面が何になる、矢張復讐ぢやないか、猶太人だつて同じだ、悪い事はお前方が教へて呉れたからするんだ、だがの、する以上はお師匠さん以上やつてのけるのだ』

シヤイロツクがありつただけの悪態を吐いて居る所へ、チユーバルと云ふ同じ猶太人の仲間が来て、アントニオの船が、ツリボリスからの歸航に難船したため、あの男はもう破産するより外はないと話す。するとシヤイロツクは、

『うん、それは有難い、奴め、うんと痛め付けて呉れる、……チユーバル、

「ね、御願ひで御座いますから、お選び遊す前に、せめて一日か二日お待ち遊ばせな、と申すのは、若しお失敗遊ばせば、それつ切りお別れ仕なければなりませんから、暫くお待ち遊ばせな、……」して妾、一言いつていたとき度い事が御座いますの、でも、これは愛では御座いませんわ、——と申しても、憎しみは恚な感じを起させるものではないと云ふことを御承知で在つしやいませう、いづれにしても、妾がよくお解りでないやうでは困りますわ、——でも、處女の身としては、思ふやうなことが、何うしても口からは出ないのですもの、——妾、貴下がお選びなさるまでに、一月か二月お留め申して置き度いのですわ。——何の匣を選べばよいかと云ふことを、お教へすること出来すけれど、爾うすれば誓言を破らなければなりません、ですから申しますまい、すると、貴下はお間違遊ばすでせう、爾うなると妾、あゝ誓言を破つても、お教へすればよかつたと、那樣大それた氣を起すで御座い

ませう、あゝ貴下のお眼が怨めしい、そのお眼のために、妾の心は二つになります、半分は貴下のもの、後の半分も貴下のもの……否、妾のものですけれども、妾のものは、つまり貴下のものですわ、あゝ本統に不可世の中ですわれえ、正當の持主に權利を與らないのですもの、ですから、貴下のもでも、貴下のものにならない事も御座いますわ、若し爾うなつても、それは運命のせい、妾の咎ぢやありませんのよ、——恚んなにお饒舌をするのも、時を延ばして、お選び遊すのをお止め申し度い一心からですの』

「何うか早く選ばして下さい、僕は拷問臺にかけられて居るやうです」とバツサニオが答へる。

「拷問臺にかけられて居ると被仰いますの、では何か、貴下の戀には外のものか混つて居りますのれえ、白状なさいませよ、バツサニオ様」

「私の戀が成就するか、仕ないかと云ふ疑惑の二心がある許りです、——若

し私の戀に二心がありとすれば、雪に火が伴ふでせう」

『けれども、貴下は拷問臺にかけられて被居やるから那樣ことを被仰るのでせう、拷問にかけられると、人は好い加減なこと申しますから』

『命だけは助けてやると被仰るならば、白状します』

『では白状なさいまし、お助け申しますわ』

『白状すれば、思ひ憧れて居りまする、——これが自白の全部です、責めら

れても嬉しい、責める役人が、助かるやうな返事を教へて下さるのですから、

——だか、試つて見ませう、さ、御案内下さい』

ボオシヤが垂れて居る帷を引くと、其の中には三つの匣がある。

『さア、此の三個の中の一つには、妾の肖像が入れてありますの、若し貴下

が妾を愛して下されば、屹度お當てになりませう、……さ、ネリツサも、皆

のものも、離れてお在で、それから、お遊び遊す間、奏樂をおさせよ、爾う

すれば、若しお間違ひ遊しても、音樂に送られて、白鳥のやうに影をお隠し

になれば可い、もつとそれを巧く申さうならば、妾の眼から流れる涙の川が、

其の白鳥の死に場所御座いませう、けれども、若しお當て遊したら、其時、

音樂は、戴冠式の音樂になりませう、結婚の日に、花婿を呼覺す音樂になり

ませう、……あれお進みなさる、あのお妾は、海の怪物に犠牲として献げら

れトロイ王の姫君を、取り返しにお出でになつたハーキュリーズの勇ましい

お妾ですわ、……さ、お出遊ばせ、ハーキュリーズ、貴下さへ活きて在つし

やれば、妾も活きて居るけれど、あゝ戦をなさる貴下よりも、戦を見て居る

妾の心は、まア何んなでせう』

其の間に音樂が奏される、パツサニオは、眼前に置れてある、金、銀、鉛の三

つの匣の中、何れを撰んで可いか、左思右考、獨り思案に暮れて居たが密に心

に思つた。

と飾りと云ふものは、皆な人を危険に導くものぢや、だから、燦爛した黄金の匣よ、私はお前を取らない、又お前をも取らない、蒼白い銀よ。」

恠う言つて、パツサニオは、二つの匣を排けて三番目の鉛の匣を見た時、

「……態の可い事を言はないで、寧ろ人を脅す鉛の匣よ、私はお前の卒直な所が、能辯よりも一段と氣に入つた、私はお前を選ばず！ 何うか、好い結果が得られるやうに！」

先の程より小さな胸の動悸を高めて、脚と容子を見て居たボオシヤ姫は、嬉しさの餘り、思はず獨り語を言つた。

「あゝ、疑惑も、失望も、心配も、嫉妬も、もう全然消えて了つたわ、……あゝ、戀よ、有頂天になつてはなりません、好い加減に喜びを降らしてお呉れ、度を過ぎてはなりません、餘り嬉し過ぎる、もつと尠くしてお呉れ、妾、嬉し過ぎるのが恐いのよ」

『全く外部のみを見せやうとするものは、内容が尠いものである、兎角世間は虚飾に欺かれ易い。法律上の事に於ても、恐ろしい悪事が、時に巧みな辯護に依つて掩はれる事がある、宗教上に於ても、嚴肅な老僧が、經文を引いて祝福すれば、罪惡も巧みに掩はれて了ふ、何んな惡徳でも、必ず表面は美徳で包まれて居る、心の中は、砂で築いた階段のやうでありながら、頸にはハークユリーズや軍神の髻を生して居るものが澤山にある、腹の中を探ると、乳色の肝の臟をして居る癖に、表面には勇者の飾をつけて居るものがある、美人を見るが可い、それが目方で賣買されて居るのが判るだらう、その目方が不思議にも奇蹟のやうな作用をする、白粉の目方が増へるだけ、美と云ふものが軽々しくなつて了ふ。あの蛇のやうに縮れた金髪、艶めかしく風に飄る金髪、てれば表面は如何にも美しく見えるけれど、大抵はそれも他人の遺産なのだ、それを育て上げた頭蓋骨は、今は墓の穴の中に居る、考へて見る

汝は皮相の美によりて選ばず。
 かるが故に眞を得たり。
 此の幸運に會せし上は
 足るを知りて、他を求む勿れ。
 汝若し是を以て満足し、
 汝の運命を天祿としなば、
 汝の姫の立てる所に進み。
 愛の接吻をもて、
 妻たることを求めかし。

マツサニオは鉛の匣の中から巻物を取り出して讀み始める。

『それに、何が入つて居るのだ……』とマツサニオは其の間に鉛の匣の蓋を取つた、中から出たのは、美しいボオシヤ姫の肖像である。
 『おゝ、こりやボオシヤ姫の肖像だ、まあ何と云ふ神のやうな名畫家が、これ程眞に逼る畫を畫いたのであらう、おや眼が動くのか、それとも、私の瞳に映つて動くやうに見えるのか、甘い呼吸の通つて居る唇、かう云ふ快息が通へばこそ、上下の唇が開くのであらう、髪の毛を畫くためには、畫工が蜘蛛の眞似を仕居つた、そして蜘蛛の巣が蝸を取るよりも、もつとしつかりと男の心を捕へやうとして金糸の網を編み居つたわい、だが、此の目附を、一體畫工は何うして畫き上げたたらうか、恐らく此の一つを畫いたので、奴の二つの眼は恍惚とした事であらう、——だが、私の褒辭が、此の畫の價値に及ばぬやうに、此の畫は連も本物に及びも付かぬ……おゝ、此處に目錄がある、私の運命の要略が書いてあるわい』

の、唯だ貴下ゆゑに、妾自分の才徳も経緯も、財産も友達も、數へきれないほど、稱りきれないほど見事に立派にし度いと思ひますの、けれども、唯今の妾は、唯だない物許りですの、教育のない、しつけのない、見習いのない娘で御座いますの、唯だ仕合せなことには、未だ教へて下されば習ふことの出来る位若い齡で御座います、又仕合せなことには、習ふことの出来ない私、馬鹿にも生れて居りませんの、一番幸福なことには、柔順に生れて居りますから、貴下が御命令の事は、殿様や、御領主様や、王様から御指圖を受けたやうに、よく守ります。妾と、妾の物は、今から皆んな貴下の御所に變るので御座います、今しがたまでは、妾は此の邸の主人であり、此の召使ひ達の主人でもあり、妾自分でも女王で御座いましたが、今からはもう、此の家も、此の家來も、妾自身も、皆んな貴下の物で御座います、妾は此の指環と一緒に、それ等のものを貴下に御引渡し申します、若し此の指環を

「や、何と云ふ氣の利いた巻物だらう、お姫さん、失禮ですが、書面の通りに、貴女に接吻して、貴女を夢取りに來ました……」

バツサニオはボオシヤ姫に接吻する。

「……けれども賞與を貰はうとして、競争した者が、自分では巧く行つたと思つても、多数の喝采や賞讃の言葉を聞くと、氣が遠くたつて、自分を褒めて呉れたのか何うかと、それを疑つて目を見張つて居るやうに、私もそれを疑つて居るのです、貴女が、確かだと言つて、證明して、奥印をして下さるまでは——」

「バツサニオ様、妾は、貴下が御覽遊す通り、唯だこれだけの女で御座います、自分だけでは、妾これ以上のものにならうなぞと云ふ、那樣大膽な考は持て居りません、けれども、貴下の事を思ひますと、妾、六十倍も優くなり度いと思ひますの、千倍も美しくなり、一萬倍も富有に成り度いと思ひます

お失し遊すか、お棄て遊ばしたならば、それは貴下の御愛情の無くなつた兆
で御座います、必ず御怨み申し上げます』

それを聞いたバツサニオは、もうぞくぞくする程嬉しさがこみ上げて来る。

『私はもう一言も申上ることは出来ません、私の沸き立つて居る五體中の血
が貴女への御返辭で御座います、私の感情はもう惑亂して居ります、恰度人
望のある國君が、演説した後で、言ひ表はすとも表はさないと付かず、群
衆が唯だ嬉しさに騒々として居るやうに、私には何も言ひ表はすことは出来
ません、——けれども兎に角此の指環を私の手から離すことがあれば、此の
命も私を離れるものとお思ひ下さい、即ちバツサニオは死んで了ふのです』
先刻から腰元のネリツサと、バツサニオの友達のグレシヤノは、ホオシヤ姫
とバツサニオの約束が取結ばれて居る間に、自分達も結婚を約束して了ふ、
乃でグレシヤノは

『御兩人とも幾久しくお喜びをお享けになるやうに希望いたしますが、お二
方の御婚禮式と同時に、何うか手前にも結婚式を擧げるやうに御許しを願ひ
ます』と言ふ。

『よろしいとも、心當りさへあるならば、御結婚なさい』

とバツサニオが言へば、グレシヤノは、腰元のネリツサと約束したことを
明す、乃で兩人は茲でホオシヤ姫より結婚の許可を得る。

恰度其處へ、ヴェニスからアントニオの手紙を持って來たソラニオと云ふ男と、
一緒にかの猶太人の娘ジュシカとロオレンゾオが、此處までやつて來る。

アントニオの手紙を受け取つて讀み下したバツサニオの顔は、俄に憂の雲に
掩はれた、ホオシヤはそれを不審に思ひ、何事が起つたのかと尋ねる、乃でバ
ツサニオは、アントニオに頼んで、仇敵とも云ふべきシヤイロツクから金を借
りた當初からの顛末を委しく話して、

『それ程無理をして来たのに、今は、その友達の船が、皆んな破船して、友達に期限までに金を返済することも出来なくなつた』
と云ふ、するとソラニオも横から、

『いへ、それ許りぢや御座いません、シャイロツクは「期限が切れた以上は、金は受取らん、飽までも正常な裁判をして貰つて、是非とも科料だけの人肉一封皮を貰い度い」と、公爵様をせがんで居ります』
と口を添へる。それと聞いたボオシヤは、自分の良人の信友とも云ふべき人の、體に傷一つも付けられないから、直と行つて、假令その金を二十倍にしてもお返へし遊ばしませ、それまでは妾はネリツサと一緒に、處女や寡婦の生活を仕て居りますから、早く行つて其方をお救ひ遊せと勤める。其處でパツサニオは、グレシヤノ、ソラニオなどを伴つて、直とヴェニスを指して出發する。

* * * * *

ボオシヤ姫は良人パツサニオの留守中、監督をロオレンゾとシエンカに任して、自分と腰元のネリツサは、良人の歸るまで、神に祈誓をかけるために、此處から二哩許り離れた庵室へ行つて來ると言つて頼んで行く。

そして、其の實ボオシヤ姫は一通の手紙を持たして、一人の使を親戚のペラリオ博士の許へやり、博士が渡す一切の書類や着物を受取て來てお呉れと頼む。ボオシヤ姫が斯様なことをしたのは、良人の信友アントニオを救ふ一つの策略があつからである。二人は何んなにしてアントニオの難儀を救ふ心算であらうか。

* * * * *

愈々期日にアントニオ對シャイロツクの裁判が開かれることになつた、ヴェニス法廷には國君たる公爵を初めとして、重役等の外に被告アントニオ、それに彼れの友人パツサニオ、グレシヤノ、サラリノなど、數多居並んだ。

第四幕

第一場

公爵。『アントニオは居るか。』

アントニオ。『はい御前に居ります。』

公爵。『其方は可哀さうなものぢや、其方の對手方シヤイロツクは石のやうな頑

固な人非人で、慈悲の心と云つては露程も持つて居ない奴ぢやからのう。』

アントニオ。『閣下が、段々と彼奴を御諭し下さつたと云ふことを承りました

が、飽までも無法なことを言ひ通します上は、最早や正當の方法を以ては、

とても彼奴の害心を免れることは出来ませぬから手前は覺悟して、如何な恐

ろしい要求にも應ずる積りで御座います。』

公爵。『こゝろ誰か猶太人を法廷へ呼び出せい。』

サラリノ。『ハイ、戸口に控へて居ります——やつて参りました。』

シヤイロツク入場す。

公爵。『其處を明けて彼を予の前に立たせよ——コラ、シヤイロツク、世間でも

さう思ひ、予も亦さう思ふが、其方が斯様に無法なことを言ひ張るのは、裁

判落着の間際までのことであつて、いざとなれば今までの殘酷な仕方が不

議に思はれたやうに、お前の慈悲心が亦不思議に思はれる程、打つて變つた

行をするであらうと思つて居る、そして、今お前が、嚴しく催促つて居る此

の哀れな商人の肉一封度の料金を免す許りでなく、慈愛の心を起して、元金

の一部は免して遣すことと信じて居る、それと言ふのも近頃此の商人の身の

上に、種々の失敗が重つて頭も能う擡居らぬと云ふ有様を、其方とても可哀相と思ふであらうから——たとへ、心が石や金のやうで、更に慈愛と云ふ事を知らぬ土耳古人や體面人でも、よも彼を可愛相と思はずに居られまい、シヤイロツク、皆が其の方の優しい返答を期待して居るぞ。』

シヤイロツク。『手前の決心は、此の前も御前に申上げて置きました、手前は證文通り科料を受取る事を神様に誓を立てました、若し、それが叶はぬと言ふ事で御座いますならば、此のお國には法律もなければ、自由も無いことになりませう、貴方様は、何故手前が三千兩の金を受け取らないで、つまらない人肉一封度を欲しがるのぢやらうと、御不審でも御座いませうが、それには、お答へは致しません、ぢやが、それが、私の物好きだと申しましたら如何で御座います、又、若し手前が、宅に鼠が暴れるから、それを殺して呉れる者に、一萬兩遣はさうと申したら、如何で御座いませう、それが不思議で

御座りますか、世間には、口を開いてる豚を見て、ツツとする者もあります、猫を見て氣の狂ふ者もあります、藪笛の音を聞いて小水を催す者も御座ります、好き嫌いは愛憎の本で、それが人間の感情を支配して居ります、そこで、手前はお答へ致しますが、何故口を開いてる豚が厭なのか、罪もない猫や藪笛が嫌ひなのか、其の理由を申上げられませんかと同様に、手前が損と知りながら、アントニオに、斯様な訴訟を致しますのも重なる怨みがあつて、此の男が元來手前の氣に喰はぬからで御座います、それ以上理由を申すことも出来なければ、申上やうとも思ひませぬ、お解りで御座りまするか。』

アントニオ。『それでは答へにならぬ、お前は人情の無い男だ、それではお前の残酷な訴訟の辯解にはならぬぞ。』

シヤイロツク。『俺は、お前の氣に入るやうな答辯をしなけれやならぬ理由がない。』

バツサニオ『嫌ひだからと言つて殺すと云ふ法はないぞ。』

シヤイロツク『憎いと思ふ位ならば、殺し度いと思ふのが人情だ。』

バツサニオ『厭だと云ふ感じは始の間から憎しみではない。』

シヤイロツク『え、お前は蛇に二度も噛ませる氣か。』

アントニオ『どうか、猶太人と問答して居るのだと思つて呉れ玉へ、若し奴を

説き伏せることが出来るならば、君は海岸に立つて大洋の高い波に、平常の

高さから引下されと云ふことも出来るだらうし、狼に向つて、何故仔羊を取

つて此羊を泣かしたかと言ふことも出来るだらうし、峰の松が、山風に揺ら

れて騒ついて居る時に、それを静めることも出来るだらうし、其他、どんな

困難なことも出来る、——猶太人の心を柔げやうと思ふ位ならば。だから、

もう何も言はないで呉れ玉へ、僕は簡単な手續で裁判を受けて、猶太人の希

望通りにならう』

バツサニオ『おい、シヤイロツク、お前の三千兩に對して、此處に六千兩持つて来て居る』

シヤイロツク『若し六千兩の中の一兩づゝが六つに割れて、其一片々が

一兩づゝになつても俺は受取る氣はない、證交通りにして貰ひ度い。』

公爵『お前が人に慈悲を受け度いと思ふても今誰もお前を惠んで呉れる者も無

くなるぞ。』

シヤイロツク『悪い事をしない者が、裁判を恐がる必要はありません、御前が

たの御仲間には買ひ取られた大勢の奴隷が居りませう、それを御前がたは驢

馬や、犬や、騾馬のやうに、随分苛酷くお使いなさいませう、それはお求めな

すつた奴等御座いますから其の筈で御座います、若し手前が御前に、彼奴

等を自由にしてお遣りなさい、御姫様のお智様にしてお遣りなさい、何故あ

んなに苛酷い仕事をおさせなさいませうか、奴等も御前同様に、柔かいベッド

に寝かして、同じ様なお美味いものを食べさせてお遣りなさいと申しましたならば、御前は定めし「奴等は、俺の所有物だ」とお仰るで御座いませう、手前も亦、それと同じやうにお答致します、手前の要求する一封度の肉は、手前の高い價で買ひ求めた物で御座います、手前の所有物で御座いますから手前が頂き度いと申すので御座います、若しそれがならぬとお仰るならば、御國の法律は無いも同然で御座います、ヴェニスのは法律は、皆な無力で御座います、手前は裁判を御願ひ致します、御前如何で御座いまするか、裁判が御願ひ出来まするか。」

公爵。「予の権力を以て、此法廷を閉鎖する事が出来るのぢやが、今日此の訴訟を裁決す爲に呼び寄せて置いた、ペラリオと云ふ博學な博士が、もう参るであらう。」

サラリノ。「御前、博士の手紙を持参した使者が只今、パデユアから参りまして、

彼方に控へて居ります。」

公爵。「其の書面を持つて参れ、使ひの者も此方へ呼び入れよ。」

パツサニオ。「シツカリし給へアントニオ、元氣を出し給へ、若し、此の爲に君の血を一滴でも無くさせる位ならば、僕の此肉も此の血も、此の骨も、皆な、あの猶太人に呉れて遣るよ。」

アントニオ。「僕は、病にとつつかれて居る弱い羊だ、死ぬのは當然だ、菓物にしても、一番脆い質のは早く地に落ちる、僕もさうだ、パツサニオ君、君が生き残つて、僕の墓誌を書いて呉れるならば、此れ位結構な事は無いよ。」

ネリツサ、法律家の書記らしき服装にて入り来る。

公爵。「お前が、パデユアから来たペラリオ博士の使者かな。」

ネリツサ。『左様で御座います、之がベラリオの御挨拶で御座います。』

手紙を公爵に差出す。

パツサニオ。『何故お前はそんなに一生懸命にナイフを磨いて居るのだ。』

シヤイロツク。『其處に居る、身代限をした野郎から科料の肉を切り取る爲だ。』

グレシヤノ。『ガイ、猶太人、靴の底で磨くよりも、貴様の石のやうな心で磨け、

ズツと鋭くなるぜ、だが、どんな切れる刃物だつて、どんな切れる首斬役の

斧だつても、貴様の邪見な尖鋒には叶ひはしまい、どんな祈禱でも、貴様の

心には通じはしまい。』

シヤイロツク。『お前の持つてる智慧だけでは、とても通じやしない。』

グレシヤノ。『此の罰當りの剛情犬奴、貴様のやうな奴を生けて置くのは、御政

治の手落と云ふものだ、人間の五體に、動物の魂が宿ると云ふヒサゴラスの

説は、貴様に依つて、眞實しくなつて来た、貴様の山犬のやうな魂は、も

と狼に宿つて居つたのだが、人間を噛み殺した咎で殺された時に、其魂が

抜け出して、貴様の汚はしい阿母の體内に宿つて、貴様の體に浸み込んだに

相違ない、貴様の残忍な慾深い心が其證據だ。』

シヤイロツク。『お前が、幾ら怒鳴つても、肺の臓が痛む許りで、俺の證文から、

印形は消えやしない、お若い、お前の智慧袋を繕はないと、いまに壺なし

になるぞ、俺は裁判を待つて居るんだ。』

公爵。『ベラリオからの此の手紙に依れば、齡の若い、博學の博士を、此法廷へ

推薦したとある、一體それは何處に居るのだ。』

ネリツサ。『御前の御許を受ける迄、彼方に控へて居ります。』

公爵。『差支へない、誰か三四人行つて、丁寧に彼を案内せい、其間にベラリオ

の手紙を讀んで聞かせい。』

書記ベラリオの手紙を読む。

拜啓貴翰拜受の節は老生病臥中なりしと御承知被下度候。陳ば御使者來着と同時にバルサルと稱する羅馬の若き博士、老生訪問の爲め滯越し候故、猶太人對商人アントニオの訴訟事件は同人に申し聞け、我等兩人にて多數の書籍を調査したる上、老生の意見をも提供致し、更に博學なる彼をして足らざるを補はせ置き申し候。彼の博學は如何に稱讚するも溢美ならざる程に候へば、老生の代理として托げて閣下に拜趨せしめ候。年齢缺くるの故を以て、御優遇を缺かさせられざるやう希望仕候。實に體若うして、思慮老いたる彼が如きは、老生の未だ見ざる所に御座候。若し御採用あらんには實力は更によく彼自身を推薦致すことゝ存じ候。

ボオシヤ姫、法學博士バルサールの服裝にて入り來る
公爵。『博學なベラリオ博士の書面の趣意は承知した、彼れへ參つたのが其博士であらう……よう御出でぢやつた、貴方がベラリオ博士の處からお出でになつた方か。』

ボオシヤ。『左様で御座ります。』
公爵。『ようこそ、さあ、お掛け下されい、只今當法廷に於て訴訟中の事件は御存じであらうな。』

ボオシヤ。『よく存じて居ります、さて其商人は何れで御座りまするか、又猶太人は來れて御座いますか。』
公爵。『アントニオとシャイロツク、兩人とも前に出い。』
ボオシヤ。『シャイロツクと言ふのはお前か。』

シヤイロツク。『ハイ手前がシヤイロツクで御座います。』
 ポオシヤ。『其方今回の訴訟は實に奇怪の事件ぢや、併しながらヴェニス法律
 では、其方の提起した訴訟に就て、何等非難すべき處はないのぢや（アント
 ニオに向ひ）其方の一身は、原告の意のままにせればならぬのか。』
 アントニオ。『ハイ、左様に彼は申して居ります。』
 ポオシヤ。『證書には異議はないか。』
 アントニオ。『ハイ御座いませぬ。』
 ポオシヤ。『では、猶太人は彼に慈悲を加へて遣らなければならぬ。』
 シヤイロツク。『それは、如う云ふ理由があつてで御座りますか。』
 ポオシヤ。『慈悲心は、無理強に出すべきものではない、慈悲は静かな小雨の降
 るやう灑がればならぬ、其の徳は二重ぢや、慈悲は、之を授けるものにも、
 幸福ぢや、受けるものにも幸福ぢや、慈悲は憐れな人に取つては、最も大
 きな徳となる、若しもその徳が、王者にあれば、それは、其の冠よりも幾倍
 も尊い、王者が手にせらるゝ物は、俗界に於ける王者の權威を示すべき標徴
 であるが、若し慈悲が、王者の胸に宿るならば、それは神の御手に屬する徳
 となる。此の慈悲が正義の嚴然なのを和らぐ時に、初めて、人道が天道のや
 うになるのぢや。であるから、猶太人、其の方は正義の裁判を主張するけれ
 ども、若し正義一條で裁判したならば、誰一人助かるものはあるまい。吾々
 は毎日神様のお慈悲を祈るが、其の心を推し及ぼして、他人に慈悲を行ふべ
 きぢや、予が斯様に申すのは、其方が正義一圖の申立てを寛和げやうためぢ
 や、それを飽までも其の方が言ひ張るならば、ヴェニスに嚴格な法廷は、そ
 の商人に判決を下さなければならぬ。』
 シヤイロツク。『手前の行ひが悪ければ、手前の命を御召し下されい、手前は
 法律に依つて證文通りに料金を要求致します。』

シヤイロツク。『ハイ手前がシヤイロツクで御座います。』
 ポオシヤ。『其方今回の訴訟は實に奇怪の事件ぢや、併しながらヴェニス法律
 では、其方の提起した訴訟に就て、何等非難すべき處はないのぢや（アント
 ニオに向ひ）其方の一身は、原告の意のままにせればならぬのか。』
 アントニオ。『ハイ、左様に彼は申して居ります。』
 ポオシヤ。『證書には異議はないか。』
 アントニオ。『ハイ御座いませぬ。』
 ポオシヤ。『では、猶太人は彼に慈悲を加へて遣らなければならぬ。』
 シヤイロツク。『それは、如う云ふ理由があつてで御座りますか。』
 ポオシヤ。『慈悲心は、無理強に出すべきものではない、慈悲は静かな小雨の降
 るやう灑がればならぬ、其の徳は二重ぢや、慈悲は、之を授けるものにも、
 幸福ぢや、受けるものにも幸福ぢや、慈悲は憐れな人に取つては、最も大

ボオシヤ。『商人は、金を能う扱はぬのであるか。』
パツサニオ。『イヤ、金は手前が彼に代つて支拂を致します、元金の二倍に致しまして。若しそれで不足ならば私の手なり願なり、心臓なりを抵當に致しましても、十倍にでも致しまする、それでも不足だと申しますならば、正義呼ばはりの裏には、害心が潜んで居なければなりません、どうぞ政府の御力で、大義の爲めには、少し許り御制度を枉げさせられても、此の様な悪人をお懲らしめ下さるやうに願ひます。』

ボオシヤ。『いや、それはならぬ、ヴェニスに於ける、如何なる権力を以てするも、法令を枉げることは出来ぬ、一度例を作ると、それが多くの間違の原因となつて國家に煩ひを及ぼすから、それはならぬ。』

シヤイロツク。『ダニエル様の再来だ、お若いのに恐れ入つた裁判官さんだ。』
ボオシヤ。『どうか、其證文を予に見せて呉れ。』

シヤイロツク。『ハイ、それは此處に御座います。』

ボオシヤ。『シヤイロツク、被告は此の金額の三倍を支拂ふと言ふて居るぞ。』

シヤイロツク。『誓言、誓言、手前は神様に誓言致しました、自分の魂に偽誓言が出来ませうか、ヴェニス一國に代へても出来ませんわい。』

ボオシヤ。『さて、此の證文は既に期限が経過して居るから、猶太人は正當に其の商人の胸元から一封度の肉を切り取る権利がある、けれども慈悲心を加へてやれ、そして三倍の金を受取つて證文を引裂いてやれ。』

シヤイロツク。『證書面通り支拂が濟めば、引裂きませう。貴方様は立派な裁判で入らつしやるらしい。法律もよく御存じだし、解釋も確かなもんだ、手前は貴方様を立派な國家の柱石だと思ひますから、法律を楯に申上げます、どうぞ、裁判の進行を願ひます、手前は自分の魂にかけて誓ひます、もう一人の口先では手前の心を變へることは出来ません、どうぞ、證書通りにお願

致します。』

アントニオ。『手前も裁判をお進め下さるやうに御願ひ致します。』

ボオシヤ。『では是非もないことぢや、其方の胸に、彼のナイフを受ける覺悟を
せい。』

シヤイロツク。『實に公明な裁判官だ。』

ボオシヤ。『此の證文に書いてある料金は、法律の目的及意義の上へ言つても、
充分理由のある事だ。』

シヤイロツク。『其の通りで御座います、實に賢明な裁判官様だ、見掛けよりも
すつと老成して御出でなさる。』

ボオシヤ。『それだから胸を明けい。』

シヤイロツク。『ハイ胸で御座います、證文にさう書いて御座います、「胸元より」
と書いて御座います。』

ボオシヤ。『さうだ、だが、肉を量る秤器があるか。』

シヤイロツク。『ハイ、用意して居ります。』

ボオシヤ。『シヤイロツク、其の方の自費で、出血を止める爲に外科醫を呼んで
置け、死ぬかも知れないから。』

シヤイロツク。『證文にそんな事が書いて御座りますか。』

ボオシヤ。『さうは書いてない、けれども、其れ位の情けを掛けるのは、あたり
前の事ではないか。』

シヤイロツク。『そんな事は書いて御座いません、證文に御座いません。』

ボオシヤ。『コラ商人、お前は何か申すことはないか。』

アントニオ。『ハイ、少し御座いますが、覺悟はもう定めて居ります……パッサ
ニオ君、握手して呉れ給へ、御機嫌よう僕が君の爲めに、慥んなになつたか
らと言ひて、嘆いて呉れ給ふな、運命の神様は僕に對して、まだまだ、親切

なのだ、運命は、不幸な人間を財産から離れさせて、竊んだ眼をして、額に
皺を湛へて、自分の貧乏を見さすのが通例だけれど、そんな不幸から、私を
逃れさせて呉れたのは、せめてもの幸福だ、どうか奥さんによろしく、アン
トニオの最期の次第と、どんなに僕が君を愛して居たかと云ふことを、よく
奥さんに話して呉れ玉へ、そして、君に替つて一人の親友があつたと云ふこ
とを、言へるかどうかを、奥さんに判断して貰つて呉れ玉へ、君は、友達を
失つたことを後悔しない方がいゝ、僕も負債を拂つたことを後悔しないから。
何故かと云へば、若し、猶太人が、深く切れば僕は全心を以て、支拂ひする
ことが出来るのだから。』

パツサニオ『アントニオ君、僕は自分の命程大切な妻を娶つて居る、けれども
生命其のもの、僕の愛する妻も、全世界も、僕に取つては、君の命以上に尊
いものではない、僕は皆を失つても可い、皆を犠牲にしても可いから、此

悪魔の手から君を救ひ度いのだ。』

ボオシヤ。(獨語のやうに)『若し細君がそんなことを言つてるのを聞いたら、あ
まり嬉しくは思はないでせう。』

グレシヤノ『僕にも妻があつて、非常に可愛がつて居るが、若し死んで天に居
て呉れたらば、此の狼のやうな猶太人の心を入れ代へて下さるやうに神様に
直訴して貰ふのになア。』

ネリツサ。(獨語のやうに)『そんなことを細君に聞えない所で言はないと、家の
中が揉めますよ。』

シヤイロツク『耶蘇信者の男は皆あれだ、俺も一人の娘がある、けれども、耶
蘇の亭主を持たす位ならば、バラバ(強盗)の血統の者にやつた方がまだ優
しだ、……時間が潰れますから、どうぞ、御宣告を願ひます。』

ボオシヤ『其商人の肉一封度は其方のものである、法廷が之を許し、法律が之

を其方に與へる。』

シヤイロツク。『實に公明な裁判官さんだ。』

ポオシヤ。『そして、其方が手を下して、彼の胸元から肉を切り取らねばならぬぞ、法律は之を許し、法廷は之を是認する。』

シヤイロツク。『實に博學な裁判官さんだ、——さあ、宣告だ、覺悟しろ！』

ポオシヤ。『鳥渡待て、外に申す事がある、此證書には、一滴の血たりとも、其方に遺るとは書いてない、唯肉一封度とのみ明らかに記してある、であるから、其方は證書の通り肉一封度を切取れ、けれども、若しそれを切り取るに當つて、其方が基督教徒の血一滴でも流したならば、ヴェニスに依つて、其方の地所も財産も凡て、ヴェニスの國庫に没收するから左様心得ろ。』
グレシヤノ。『實に公明な裁判官さんだ、見る猶太人、實に博學な裁判官さんだ。』
シヤイロツク。『それが法律で御座いますか。』

ポオシヤ。『其方の眼で法律の條文を見るがよい、其方が嚴重な裁判を希望するから、其方が希望した以上の、嚴重な裁判を受けなければならぬと思へ。』

グレシヤノ。『實に博學な裁判官さんだ、どうだ見る、猶太人奴、なる程博學な裁判官さんだ。』

シヤイロツク。『それでは手前は、彼の申出ました通り、證書面三倍の金を貰つて許してやりませう。』

パツサニオ。『其金は此處にある。』

ポオシヤ。『待て、猶太人は、法律通りの裁判を要求して居る、待て急ぐな、猶太人は科料以外に何物も受取ることは出来ぬのぢや。』

グツシヤノ。『ドウだい猶太人奴、公明正大な裁判官さんぢやないか。』

ポオシヤ。『であるから肉を切り取る用意をせい、だが、一滴も血を流してはならぬ、又一封度より、多くも、少くも切取ることばならぬ、若し其方が、丁

度一封度より、多くか少く切り取つたならば、いや、一分一厘程の秤目の相違でも、髪の毛程の秤目の差が出来ても、其方の財産は悉く國庫に没收するぞ。』

グレシヤノ。『ダニエルの再来だ、どうだ猶太人、降参したか。』

ボオシヤ。『何故、猶太人は躊躇して居る、早く科料を取れ。』

シヤイロツク。『手前に元金丈を受取らして歸らして頂き度うございます。』

パツサニオ。『お前にやると言つて準備して居るぢやないか、さあここにある。』

ボシヤ。『いや、彼は公けの法廷に於てそれを拒んだ、唯彼は法律通り、證書

通りにして貰ふより外はない。』

ダレシヤノ。『ダニエル様だ、ダニエル様の再来だ、お、猶太人、お前がうま

い言葉を教へて呉れて有り難い。』

シヤイロツク。『手前の元金丈でも受取れないで御座いませうか。』

ボオシヤ。『其方が命がけで切取る可き科料の外は何も無い。』

シヤイロツク。『ぢや、どうでも勝手にしやがれ、もう議論は無益だ。』

ボオシヤ。『待て猶太人、法廷にはまだ其方に用事がある、ヴェニスに依

れば、外國人が直接又は間接に、當ヴェニス市民の生命を取らんとした時に

は、其財産を二分して半分は國庫に没收し、半分は被害者たらんとする者が

取る規定になつて居る、そして犯人の生命は唯公爵の御仁慈に依る外はなく、

何人も異議を申立てることは出来ないことになつて居る、其方の罪は、之に

該當して居る、直接間接に其商人の生命を奪はんとしたから其方は唯今申し

た罪科を免れぬ、其故跪いて公爵閣下の御慈悲をお願い申せ。』

ダレシヤノ。『手前で首を絞つて死す御許しても願ふがい、又手前の財産は國

庫に没收されて了ふのだから、繩を買ふ餘裕もないだらう、だから、お上の

手で首を絞めて貰はなくぢやなるまい。』

公儀。『吾々の精神が其方と違つて居ることを示す爲に、予は其方が願ふまでもなく、其方の生命を助けて遣はす、其方の財産の一半はアントニオの物である、他の一半は國庫に没收すべき筈であるが悔悟すれば科料で免して遣はす。』
ボオシヤ。『アントニオの分は兎に角、國庫に收める分は其れがよろしう御座います。』

シヤイロツク。『イヤ、命も何もかも取つて貰ひ度い、許して貰ひ度くない、俺は家を支へる大柱を取られるのだから、家を取られるのと同じだ、生活の資本を取られるのはつまり命を取られるのだ。』

ボオシヤ。『アントニオ、其方は彼に情をかけて遣はす氣か。』

ダレシヤノ。『無料で首を縊る繩一筋、其外何が遣れるものか。』

アントニオ。『公爵閣下を始め、御列席の方々、どうぞ猶太人の財産の半分は科料で御許を御願ひ致します、また後の半分は、手前に御預け下されば有り難

い仕合せに存じます、彼の死後、彼の娘と、遠國して參つた、若者に渡す御座います。尚二ヶ條の御願ひが御座います、一ヶ條は、御仁恵に依りまして、彼が直ちに基督信者に相成りますやう、又今一つは彼の死後、財産一切を其娘夫婦に譲ると言ふ證書を當廷に於て認めますやうに御命令を願ひ

まする。』

公爵。『シヤイロツクは其の通りせればならぬ、若しそれを否むに於ては、予が

唯今言ひ渡した赦免も取消しにいたすぞ。』

ボオシヤ。『何うちや猶太人、承知したか。』

シヤイロツク。『宜しう御座います。』

ボオシヤ。『書記、財産讓渡證書を。』

シヤイロツク。『これでお暇を御願ひいたします、手前は病氣で御座います、何うぞ證書は宅へ御送りを願ひます、記名いたしますから。』

公使『行つてもよろしい、然し命令通りにいたせ。』
 グレシヤノ『おい洗禮を受るには二人の立合人が要るぞ、若し俺が裁判官なら、俺は立合人を十人にして、貴様を洗禮盤に連れて行くよりも、絞首臺に連れて行くものな——。』
 シヤロツクは憎々と退場する。

公使『博士、貴下は何うか邸まで来て、御會食に臨席を願ひ度いものぢや』

ボオシヤ『有難う御座いまするが、それは何うぞ御免を願ひ度う御座います、實は今宵の中に、是非ともパヂユヤの方へ参らねばなりませんで、それには、直と出發をせねばなりません。』
 公使『御都合が悪いとは、實に残念な事ぢや……、アントニオ、よく御禮を申上げよ、其方は全く此のお方のお蔭で助かつたのぢや。』

公爵及び従者退場す。

パツサニオ『閣下、手前と手前の親友は、全く貴下様のお方に依つて、今日、あの恐ろしい科料から免かれました、就きましては、今日猶本人に遣はしまする筈の此の三千兩を、閣下に献上致しまして、聊か御禮の章といたし度いと存じまするが……。』

アントニオ『此後長く閣下の御厚志を記憶いし度いと存じまして……。』
 ボオシヤ『自分で満足して居るものは、既に充分の報酬を得て居るのです、私に貴下を救い得たので、満足して居るのです、即ち、それだけで既に充分の報酬を得て居るのです、私の心は、それ以上の報酬を望みませんでした、何うか、重ねてお目にかゝるまでお見知り置きを願ひまする、では御禮嫌よう』

これで失禮いたします。』
パツサニオ。『閣下、押し返して御願ひ致さればなりません、何うぞ御禮としてでなく、紀念として何か手前どもからお持ち歸りを願ひ度う存じまする——何うぞ二つの條件を御許し下さいませ、御辭退なさらぬと云ふことと、失禮を御免し下さると云ふことを。』

ポオシヤ。『それまでに被仰るのならば、仰に従います、(アントニオに向ひ)私に貴下の手袋を戴き度い、紀念として使用いたしませう、(パツサニオに向ひ)それから、貴下の御厚志にあまへて、其の指環を頂戴いたします、手を引込まないで下さい、外には何も頂戴いたしませんから、——御厚誼が御有りなさるんだから、定めしお嫌とは被仰いませんでせうな。』
パツサニオ。『いや、此指環許りは何うも、——是れはひどいのです、閣下に差上げるやうなものぢや御座いません。』

ポオシヤ。『此の外には、別に戴き度いと思ふものは御座いません、唯だそれが欲しいのです。』

パツサニオ。『是れは、価値と云ふことの外に少し仔細があるのです、ヴェニスの中で一番佳い指環を差上げませう、廣告で探し出して、差上げませう、——けれども、何うか之れ許りは……。』

ポオシヤ。『は、は、は、貴下は御提供だけは大きい方ですれ、初めには私に、何でも要求せよと御教へになつたが、後では、強請る奴は馬鹿を見るのだと云ふことを御教へなりましたね。』

パツサニオ。『實は閣下、此の指環は妻が手前に呉れたもので御座います、そして妻はこれを手前に穿めさせす時に、賣つてはならぬ、與つてはならぬ、失くしてはならぬと誓を立てさせたので御座います。』

ポオシヤ。『爾う云ふ口實は、人に物をやるまいと思ふ時に、多くの人に役立ち

ます、——若し貴下の御細君が狂人でない以上、私が此の指環を頂戴しても
可い位の功勞がある事を御存じならば、それを私に下すつたからと言って、
何時までも貴下をお怨みになることはありませんまい、では、御機嫌よう。』

ポオシヤとネリツサ、共に退場す

アントニオ。『バツサニオ君、その指環をあの人に遺つて呉れ給へ、細君の命令
でもあらうが、まあ然し、あの人の厚意と、僕への友誼のために換へて呉れ
給へ。』

バツサニオ。『さ、グレシヤノ君、走つて行つて、此の指環をあの人に渡して來
て呉れ給へ、そして出來ることならば、あの人をアントニオの邸まで連れて
來て呉れ給へ、さ、急いでくれ合へ。』

グレシヤノ退場す

君と僕は直ぐと君の家へ行かう、そして明日の朝早く二人でベルモントへ急
がう、さ、行かう、アントニオ君。』

二人とも退場す

第二場

ダエニメの街上

ボオシヤ。猶太人の家を探れ出して、此の證書に記名さしてお呉れ、そして妾達二人は今夜の間に出發て、良人達より一足先きに家に歸り度いものだわれ、——それから、此の證書を見たら、定めてロオレンツが喜ぶだらうね。』

グレシヤノ出づ

グレシヤノ。『や、先生、幸つと追付きました、手前の主人パツサニオは、考へ直して此の指環を献上いたすことにしました、就ては、御兩所に粗酒を献上いたし度いと申して居りますが、如何で御座いませう。』
ボオシヤ。『いやそれは出来ません、此の指環は、有難く頂戴いたして置きます何うか爾う被仰て下さい、それから、御願ひですが、此の若者に、シヤイロツクの宅をお教へ下さらん。』

グレシヤノ。『承知いたしました。』

ネリツサ。『ボオシヤに向ひ、貴下に鳥渡とお話しいたし度い事が御座います、(ボオシヤだけに)妾の良人の指環も取れるか何うか試つて見ますわ、あれにも、約束した時、一生離しちやならないと、誓を立てさしてあるですから——。』

ボオシヤ。(ネリツサだけに)屹度取れるから、試つて御覽、あとで、屹度女に遣つたんぢやないと言つて、言ひ張るに相違ないわ、だけど、妾達は、良人達を耻しめて、言ひ負かしてやるわ、(大いなる聲にて)さ、急いで行つてお出で、私の待つて居る場所へ解つて居るね。』
ネリツサ。『さ、其の家へ御案内を願います。』
一同退場す

第五幕

第一場

ベルモント。ホオシヤ邸への小徑

ロレンゾとジエシカと出る

ロレンゾ。『好い月だねえ、恁麼晩に、氣持の好い風が、窺つと、葉を鳴らさない程に樹を接吻して行くのは。恁麼晩だらうね、王子トイラスが、トロイの城壁に登つて、クレシツド姫の寢て居るギリシヤ軍の天幕の方を俯瞰して、溜息をついたのは——。』

ジエシカ。『恰度恁麼晩だわね、姫のシスビが恐々露を踏んで約束の場所へ行つ

て、獅子の影を見て、吃驚して逃げ出したのは——。』

ロレンゾ。『恁麼晩だつたらうね、女王のグイドウが、柳の枝を持って河岸に立つて戀人を、もう一度カーセーヤへ呼び戻そうとしたのは——。』

ジエシカ。『恰度恁麼晩だつたわねえ、メテヤ姫が老人のイーソン王を若返らせやうとして、靈藥の草を集めたのは——。』

ロレンゾ。『恁麼晩だつたらうねえ、金持の猶太人の娘ジエシカが、厄災男と一緒にヴェニスから、ベルモントに突つ走つたのは。』

ジエシカ。『恁麼晩だつたわねえ、ロレンゾと云ふ若い男が、可愛い、可憐いのと、出放組を言つて姫を欺くらかしたのには——。』

ロレンゾ。『恁麼晩だつたね、可愛いジエシカが、小さな嬪のやうに、亭主の悪口を言つたのは、そして、亭主がそれを黙つて居たのは——。』

ジエシカ。『恁麼話したするのは負けやア仕ないけれど、誰れか来たようだわ、

ポオシヤ姫より留守を頼まれて居るロレンゾ夫婦が、恚んな話をして戯言て居る所へ、ステファノと云ふ使が来る。

ロレンゾ『誰れだ、恚麼夜半に、大急ぎでやつて来たのは。』

ステファノ『ステファノです、奥様は夜更前にお着になります。』

ロレンゾ『それぢや準備してお歸りを待たうよ。』

問もなくポオシヤ姫は腰元のネリツサを連れて歸て来る、ポオシヤが『夫の無事を祈願して来たのだから、多分無事にお歸りになるだらうと思ふ、お前方は決して妾達がお祈りに行つたと云ふ事を他言するのぢやないよ』と言へば、『お歸りになると云ふ報知が来て居る』とロレンゾが答へる、其間にパツサニ

オの到着を知らせる喇叭の音が聞える。

ロレンゾ『奥様、殿様が御着で御座います、私は喇叭の音を聞きます、——奥様、私共は決して饒舌者では御座いませぬから、決して御心配なさいませぬ。』
ポオシヤ『今夜は何だか太陽が病つて居るやうな晩れ、少し着過ぎるわ、晝にすればまあ太陽が隠れて居る時の晝のやうだわねえ。』

此時、パツサニオ、アントニオ、グレシヤノ、其他従者入る。

パツサニオ『太陽は隠れて居ても、貴女さへ歩いて在つしやれば、晝です。』
ポオシヤ『あかるいと被仰て下されば嬉しいけれど、かると被仰らないで下さい、さいます、輕々しい妻は、良人の氣分を重くさせますわ、けれども、貴下は

那樣ことばありませんのよ、よく御歸りになりました。』

バツサニオ。『や、有難う、僕の友達を歓迎して下さい、これがあの人です、私が非常な恩を受けたアントニオ君です。』

ボオシヤ。『此の方の御恩は決して忘れてはなりません、随分貴下が此の方の御恩になつたと云ふことを承りましたわ。』

アントニオ。『恩の何のと、それはもう済んで了つた事です。』

ボオシヤ。『貴下、よくまア入來して下さいました、とても言葉には述べ盡されませんわ、ですから、もう御挨拶書きにいたしますわ。』

恚慮にして三人が話して居る一方では、グレシヤノとネリツサが頼りに何か言ひ争つて居る。

グレシヤノ。『あの月が證人だ、僕は誓ふよ、貴女の云ふことは無理だ、本統に僕は裁判官の書記に與つたんだよ。』

ボオシヤ。『あら、最う喧嘩なの、一體何うしたのよ。』

グレシヤノ。『先日ネリツサが私に呉れた指環の事なんです、見棄てちや厭よ』と文句の影り付けてあつたあのつまらない指環の事なんです。』

ネリツサ。『指環の價値なんかは何うでも宜いのですわ、妾があれを貴下に進上

しました時に、貴下は死ぬまで飲めて居る、死んだら墓へ一緒に埋めさせると、

お誓ひなすつたぢやありませんか。妾は何うでも、貴下のあの熱心な誓言の手前、大切にしなければならぬ筈ですわ、それを裁判官の書記に與つたなど

と！ まア、何んな書記だか、多分其の書記は舞なぞ生しちや居なかつたで

せう。』

グレシヤノ。『生えては居ないけれど、丁年になれば生えるだらう。』

ネリツサ。『え、そりや婦が男になれるものならね。』

グレシヤノ。『いや、本統に、此の手で、若い男に與つたんだよ、ほんの小僧ッ

子なんだ、丈の低い少年なんだ、お前よりも丈は高かアない若い書記でね、べちや／＼とよく饒舌る小僧だつたが、報酬としてあの指環を呉れと云ふんだ、で僕は何うしてもそれを嫌だとは言へなかつたんだ。」

ボオシヤ。「遠慮なく申さればなりません、こりや、貴下の方が悪いわ、妻が呉れたものを、無暗に人に與るなんてことは、よくありませんわ。誓言して、信實の鑑いとして、貴下が指にはめて在つたものを、ねえ——。妾も一つの指環を良人にかけて、決して離してはなりませんと云ふ誓をして貰いました。……、現に此處に居ります、妾は、誓つても宜いわ、良人は世界中の寶を持つて來ても、其の指環を取り換へるやうなことはないと云ふことを、本統にグレシヤノさん、貴下は餘り酷いわ、若し、妾だつたら、妾狂人に成つて了ふわ。」

パツサニオ。(傍を向きて)「こりや弱つた、寧ろ此の手を切つて、あの指環を奪

られまいとして、恣意になつたと言張つた方が可い。」

グレシヤノ。「パツサニオ様も、請はれる儘に指環を裁判官に與つてお了いなすつたんです、それは又與らずに居られなかつたのです、すると、書記として骨を折つた其の書記生の小僧が、僕に指環を呉れと言つたんです、主従二人、指環の外には何も持て行きませんでした。」

ボオシヤ。「貴下は何の指環をお遣りになりました、あの私が差上げた指環ぢやありますまいね。」

パツサニオ。「失策をした上に、尙ほ虚言がつけるものなら、僕は「遣らない」と言つてのける所ですけれど、まあ、僕の指を見て下さい、指環はないのです、持て行かれたんです。」

ボオシヤ。「恰度、それと同じやうに、貴下の御心には信實と云ふものがないんですのね、妾、あの指環を見るまでは、貴下と一つ團では眠りませんから——」

ネリツサ。『妾も、あの指環を見るまでは、貴下のもぢやないのよ、グレシヤ
ノヨ』

パツサニオ。『ボオシヤさん、若し僕が誰れに指環を與つたのか、又誰れのため
に指環を遣つたのかを御存じなら、那樣に怒らなくつても可いちやありませんか、
れえ、僕が何の位煩悶してあの指環を遣つたか、又指環の外には何も
取らないと言はれて、詮方なくあれを手離したかを考へて下すつたら、腹を
立てることはないぢやありませんか。』

ボオシヤ。『若し貴下が、あの指環の價値を御存じであり、又あの指環を差上げ
た當人の價値を半分でも御存じであり、又貴下の名譽にかけても、あれを持
つて居なければならぬと云ふことを御存じなら、決してあれを手離す譯には
行かなかつたでせうに。何んな没分曉の男だつて、それは結婚の紀念品だと
言つて熱心にお抱みなすつたら、それでもと言張りませうか。本統にネリツ

サの言ふ通りに、何處かの女にお遣はしなすつたんでせう。』

パツサニオ。『否え、僕の名譽にかけて、誓つて申します、決して婦人なんぞに
遣たんぢあ有りません、あの民事の裁判官に三千兩遣らうと思ひましたら、
指環を呉れと言つたんです、僕も一應は謝絶して、自分の親友の命を救つて
呉れた恩人が不決な顔をして行くのを打棄つといたのです、けれども、爾う
も仕て置かれないから、追かけてそれを持たしてやつたんです、耻を思ふと、
あの儘打棄として、自分の名譽に泥を塗るに忍びなかつたんです、れえ、許
して下さい、此の月や星に對しても斷言します。若し貴女が彼處に居たら、
貴女の口から、あの博士に指環をやつてくれと秘仰つたに相違ない。』
ボオシヤ。『其の博士を宅の方へ來ないやうに仕て下さいまし、其の方が、妾の
大切な指環を持って居ると仕ますれば——、あの貴下が大切に保存とくと秘仰
つた指環を持つて居ると仕ますれば、妾も貴下のやうに呉れと言はれる儘に

何もかも遣つて了ふかも知れませんわ、此の身體も、良人の國も貸して了ふかも知れませんわ、妾、其方と懇意になるかも知れませんわ、え、屹度よ。ですから一晩だつて、家をお明けにならないで、アーガス（一百の眼をもち）のやうに、眼を見張つて妾の番をして在しやいませ、若し爾うでなくつて、打棄つといて御覽遊ばせ、妾女の操にかけて誓ひますわ、妾、その博士を連れて来て密夫にするかも知れませんわ。』

ネリツサ（グレシヤノに）妾とても其の日記を引入れるかも知れませんから、氣儘にさせて置かないでよく御用心をなさいませよ。』

グレシヤノ。いゝとも、遣つて御覽、俺がとつ捕へて、奴の大切な商賣道具のペン軸をへし折つてやるから。』

アントニオ。いや、恠う云ふ騒ぎが持上つたのも、全く私が原因で御座います。』
ボオシヤ。御心配遊しますな、貴下を悪く思ふやうな事は御座いませんから。』

バツサニオ。ボオシヤさん、今度の不都合は何うか許して下さい、此の大勢の友人の聴いてる前で、貴女の美しい其の眼にかけて誓ひます——。』

ボオシヤ。それ、それでせう。私の眼にかけて誓ふと秘仰るからには、兩方の眼にかけてと云ふのでせう、そら二心の誓ひですわ、さぞ信用が出来ませうれえ。』

バツサニオ。何うか、もう那樣ことを言はないで下さい、そして僕の過ちを許して下さい、もう決して二度と誓を破るやうな事はないから——。』

アントニオ。私は此の體を一度バツサニオさんのために抵當に入れたのです、けれども、バツサニオさんが指環をあげた方の御座を蒙ることがなければ、とうくの昔に死んで居た筈です、ですから、今度は此の靈魂にかけて、二度とバツサニオさんに誓を破らせないと云ふ保証人になりますから、何うぞ今度だけはお許し下さい。』

ボオシヤ。『では、貴下が此の人の保証人に成つて下さい。これを渡して、今度は大切にするやうに申しつけて下さいまし。』

アントニオ。『さア、パツサニオ君、此の指環を失くしないと云ふ誓ひをなさい。パツサニオ。』

ボオシヤ。『あの方から貰ひましたの、パツサニオさん、何うぞ御覧下さいまし、此の指環を持って来て呉れましたから、昨夜は博士を私の所へ泊めてやりませうの。』

ネリツサ。『妾も御免下さい、グレシヤノさん、あの倭小い博士の書記さんが指環を以て来ましたから、泊めてやりませうの。』

グレシヤノ。『ア、こりや道も悪くならない夏の最中に道普請と言つたやうなものだ、亭主達が、神妙にして居るのに、様の方で密夫を拵へて居るのか。』

ボオシヤ。『まア那樣に口きたなく御仰らんでも可いわ、皆さんが吃驚なさるで

せう、此處に手紙がありますから、ゆつくりとお読みなさい、これはバゲエアのペラリオ博士から来たんです、それをお読みになれば、ボオシヤが博士で、ネリツサが書記であつたことがお解りになります、此のロレンツが證人ですわ、妾達は貴下方と一緒にヴェニスを出発して、今し方歸て来た許りなの、未だ家へも入らなかつた位よ……、アントニオさん、ようこそお出下さいました、私は貴下に、思ひもかけぬに好い消息を持って来ました、この手紙を早く開封して御覧なさいまし、手紙の中には、貴下の船が三艘、澤山の貨物を積んで、不意に入港したと云ふ事が書いてあります、何うして此の手紙が私の手に入つたか、それを御存じありますまい。』

アントニオ。『私、言も言はれません。』

パツサニオ。『では、博士と云ふのは貴女でしたか、少とも知らなかつた。』

グレシヤノ。『私の留守中に泊まつた男と云ふのは、お前かい。』

ネリツサ『え、男にならない以上は唯だ泊つただけなのよ。』

パツサニオ『可愛い博士さん、貴下が留守中に泊つた男なんですわ、貴下なら、留守中に妻と一緒にお寝みになつても一向かまひません。』

アントニオ『奥さん、貴女のお蔭で命を助かりました、——又此の手紙によれば、私の船は、確に港に着いたに相違ありません。』

ボオシヤ『ロレンツ、貴下にも、妾の書札が長い消息を持って来て居ます。』

ネリツサ『さ、無報酬でお渡し仕ませう、(證書を渡して)それは金持の猶太人

からの、特別財産譲渡證書です、さ、貴下とジェシカさんにお渡し仕ます、

其の猶太人が死ねば、遺産は貴下のものになるのです。』

ロレンツ『奥様、有難う御座います、貴下は飢えたものにマナ(イヌラエト族がシナイ)を降らして下さいます。』

ボオシヤ『もう大抵夜明ですわ、貴下がたはまだよくお解りにならないので

せう、さ、入りませう、そして何でもお尋ね下さい、有のまゝお話し仕ますわ。』

グレシヤノ『それが宜う御座ます、で第一に私が、妻に誓はせて聞ひ度ひ事が御座います、それは、もう朝方までには二時間よりないから、明日の夜まで待つか、それとも、直ぐに寝るか云ふことです、だが、僕は夜が明けても、薄暗いことを希望するれ、書記君と一緒に寝るまではね、——。それから、今後一大警戒をすべき事は、僕の生涯に決して決してネリツサの指環を紛失しないやうにすると云ふ事だ。』

皆一同入る、

ヴェニスの商人 (人肉抵當裁判) (終)

ジヤンネットの浮沈物語

セーキスピアの「ヴェニス商人」より以前に、フ井オレンチノの「ジヤンネット」物語あり、セーキスピアが材を取りたるものなれば、参考のため左に梗概を抄出す。

伊太利フロレンスの部に、スカリイ一家の者で、ビンドウと云ふ豪商があつた、屢々ターナやアレキサンドリヤに居たこともあつたし、又長い航海を仕たこともあつた、此のビンドウは、頗る富んで居たが、自分には、最早一人前に成つて居る三人の子息があつた。

ビンドウは自分の随終間際に、二人の兄の子達を呼び寄せて、眼の前で遺言

(94)

をして、自分の財産全部を譲り渡すことにしたけれど、末の子にだけには何物も分配てやらなかつた。

末の子はジヤンネットと云ふ青年であつたが、父が兄たちを呼んで、己に遺言をしてつたと云ふのを聞いて、父の病床間近に進み寄り、

「父上、貴下は、私を少しもお心に掛けて下さらないとは、餘りお情ないでは御座いませんか。」

と言へば、父は、

「いや、ジヤンネットよ、私は、此の世の中でお前程可愛く思つて居るものはないのぢや、實はそれ故、お前には財産を残してやらなかつた次第ぢや、他の死んだ後で、お前はヴェニスに居る名付親のアンサルドーさんの所へ行くと可い、あの方は大層平素からお前を所望して居られたのぢや。」

さて、父の死んだ後、ジヤンネットはヴェニスの名付親アンサルドーの所

(95)

へ、父が生前中に書いて置いて呉れた手紙を持って行くと、アンサルドーは大層喜んで、デヤンネットーを子のやうにして惹き込んだが、其お蔭で彼はアンサルドーの後見を受けて安楽に暮らして行く事が出来た。

其後デヤンネットーは友人等に勧められて、アレキサンドリヤに航海し度いと思ひたち、その事を義父のアンサルドーに頼むと、老人は快く承諾して、彼れのために貨物を一杯積載した商船一艘を與へる、彼は直にアレキサンドリヤを指して出帆する事に成つた。

けれども、アンサルドーは出発に望み、デヤンネットーに向ひ、

『お前は決して儲けを仕やうと思つて行ぬが可い、けれども世間を見物する心算で行つてお出』と告げた。

かくてデヤンネットーは愈々出帆して、長い航海を續けて居たが、或日の事、或一つの港々発見したので、あれは誰れの領地だと言つて船長に尋ねると、『あ

れば、或る豪族の美しい寡婦さんが領して居る土地だが、あの寡婦さんには、随分これ迄に多くの男が失敗して居る』と話す。

デヤンネットーも、不圖その美人を訪れて見度いやうな気が起つたので、隠々其處で上陸して、其の美人の寡婦さんを訪問すると、寡婦さんは、多くの召使ひや家來どもを伴つて出て来て、心より歓迎の意を表して呉れた。

けれども美人は初めにデヤンネットーと恚う云ふ約束をした。

『若し貴下が妾を手に入れる事が出来ますならば、妾は貴下の妻となつ、此の家も領地も一切貴下に献上いたしませう、けれども、若し妾を手に入れる事が出来なければ、貴下の持て在しやるものは、皆んな妾に下さいまし。』
デヤンネットーは恚う云ふ約束をしたけれど、寢に就んとした時に、酒を呑まされて、それなり前後不覺に眠入つた爲め、翌朝は契約通り、寡婦さんに、船も財産も一切取られて了ふことに成つた。

かくて彼れば、耻しさの餘り、難船したと言つて、悄然とヴェニスヴェニスの市へ歸て来たが、義父なるアンサルドーには、耻ぢて顔を台はさなかつた。けれども、アンサルドーは人傳ひとつてにそれを聞いて、ザヤンネツトりの所ところに行き、種々と慰めてやつた末、今度は以前よりも更に多くの貨物を船に積して、再び航海に出してやつた。

ザヤンネツトりは、かのマルモントと云ふ港まで来ると、又もや美人の事を思ひ出して、矢も楯も堪らず、再び寡婦さんの所を尋ねて行つたが、今度も亦前と同じやうに計略にかゝつて、以前同様な哀れな目に遇つて故郷に歸る。

然し、アンサルドーの情けは以前に變らず、今度もザヤンネツトりを慰るに慰め勵し、第三の船を出してやる事になつたが、恚う續けて同じやうな不幸許りあつては、流石の豪商アンサルドーも、金に窮し、終にメストリーの或る猶太人より一萬兩の金を借用する事となる、そして六月の、聖ジョンの祭日

までにそれを返済する事が出来なければ、アンサルドーの體の中で、何處でも猶太人の好む所から、肉一ポンドを取切ると云ふ契約を結ぶ。

かくてアンサルドーは又もや船を繕装して以前よりも立派な荷物を積み込まし上、ザヤンネツトりに出發しつぱつすることにした。

さてザヤンネツトりは三度かの美人の所を訪れて彼女を手に入れんとしたが、今度は美人の侍女が、ザヤンネツトりを憐れに思ひ、彼の催眠薬を調合してある酒の事を密かにザヤンネツトりに教へてやる、夫がために、今度はザヤンネツトりも、美人の策略を免れて、其の夜は終に彼の美人の寡婦を手に入れることが出来た。

かくして彼れば盛なる結婚式を舉行して、美人の良人となつたのみか、其の地方の領主と崇められて、楽しく月日を送ることが出来た。

然るに或日の事、彼れば妻なる美人と共に窓の所に立て町を見て居ると、夥

多の群衆が手に手に炬火を點して街を行列して行くのを見た、彼は不審に思ひ、「一體これは何事であるか。」と言つて尋ねると、妻は、

「今日は聖シヨンの祭日ですから、市の人々が、供物をするために、會堂に練りながら行くのですわ」と答へる。

それを聞いたヂヤンネットーは、初めて恩人アンサルドーの身の上に、危険が迫つて居る事を思ひ出し、其の由を妻に語ると、妻も大に駭き、直さま十萬ダケットを兩を持たして、早馬で良人をヴェニスに街に旅立す。

さて良人の出て行つた後でヂヤンネットー夫人は、法律學者に變装して、二人の家僕と一緒にヴェニスに赴き、博學なる青年法學者ポロンニヤと稱して宿屋に泊り込んで居ると、かのアンサルドー對猶太人の人肉抵當裁判が、市中の大問題となつて居る。

之を聞いたヂヤンネットー夫人は、如何なる難問題でも裁判するに妙を得て居る法學者ポロンニヤが、此の市に來て泊つて居ると云ふことを、普ねく市内に言ひ觸らしめる、すると、ヂヤンネットーも、かの猶太人も、共に此のポロンニヤに裁判を頼むことに同意する。

裁判當日にポロンニヤは猶太人に向ひ、慈悲を以てアンサルドーを赦してやれと説諭する、然し、頑固な猶太人はいつかな聽き容れず、終にそれがためアンサルドーは裸體にされて、猶太人のために肉を切り取られんとかける、それを見たヂヤンネットーの煩悶は餘所目にも哀れな位であつた。

今や猶太人が剃刀を取り上げてアンサルドーの體に觸れんとする一刹那、ポロンニヤは猶太人を止めて、

「其の方が肉を切り取るに勝手なれども、その肉は、恰度約束通り一ポンドより多くも、少くも取る事は相成らぬ、又血汐は一滴たりとも流すこととはな

らぬ、若し血を流せば、其方は死刑に處せらるゝ故、左様心得よ。』
と云ふ。

此の言ひ渡しの結果、忽ち大争論となつて、終に猶太人は一萬兩の元金だ
けを支拂はれ度しと希望するけれど、ホロンニヤは、

『其方は證書面以外の科料を取る事は相成らぬ、然らざれば、右の論文は無
効なり』と言ひ渡す。

此處に於て、猶太人は大層怒つて、論文を引裂いて歸り、アンサルドーは放
免せられる。

斯くして裁判は日出度く終了したが、ザヤンネットーは喜びの餘り、かの十
萬兩を偽法律家のホロンニヤに献上せんと云ふ、けれどもホロンニヤはそれ
を謝絶して、ザヤンネットーのはめて居る指環を無理に請い求めて歸て行く、
此の指環は、ザヤンネットー夫人が、結婚の當時紀念として良人に贈つたもの

であるから、ザヤンネットーの當惑は一通ならぬ。

一方夫人はベルモントの邸に歸り、準備を調べて良人の歸りを待つて居ると、
良人はアンサルドーを伴ふて歸て来る、けれども、夫人は良人に對しては殊更
冷淡な態度を示す。

やがて夫人は良人が其指環を紛失して居るのを見咎め、多分ヴェニス的情婦
に與へたものであらうと言つて、頼りに詰る、ザヤンネットーは、事實通りそ
れを辨解するけれど、態と信じない態度を示し、益々良人を責めるので、流石
のザヤンネットーも言葉に窮し、思はず涙を流す、これを見た夫人は、急に走
り寄りて良人に抱擁し、事情判明して、一同大笑いとなる。

以上は『ザヤンネットー物語』の梗概であるが、沙翁が、『ヴェニスの商

人』を作するに當り、主として材を取つたものと思はれる。

ヂヤンネツト一の浮沈物語 (終)

アントニイと
クレオパトラ

セーキスピリア作
守田有秋纂譯

發端

大シーザーの死後、羅馬はオクタ비아ス・シーザーと、將軍レビダス(大シーザ
一の部下)とマーク・アントニイの三頭政治となり、三人は羅馬の領土を三分し
各々帝王の如き權力を以て威を四隣に振ふて居たが、中にもアントニイは、フ
ネリビの一戦(シーザー暗殺後にブルータスとカツシヤスは各其領土に歸り兵

を擧げ、アントニイとフリビに戦ふにかの大シーザーを暗殺したるブルータス、カツシアスの二將を伐ち、平けて、其の名聲遙にオクタピヤスとレビダスを凌ぐものがあつた。されど彼れは尙それにも謙らず、その新領土とも云ふべき東方諸國を巡察して後、更に兵を進めて埃及征討を企てようとした。當時埃及の王と云ふは、絶世の美人と稱せられて居るクレオパトラ女王其の人であつた。

元來クレオパトラと故の大シーザーとの間には、長い間密なる情が結ばれて居て、兩個の間には現にシーザリオと云ふ兒まで出来て居る程であるから、クレオパトラが、シーザー暗殺の下手人たるブルータスやカツシアスの亂に加擔する理由は、あるべき筈はないのである、けれども、埃及侵略の志を持つて居るアントニイは、女王がブルータス等に加擔したと云ふ難題を持ちかけ、若し、卿にして我れに異心なくば、自らタルサスなる我が陣營に來れよと、使

者アリシアスを遣はして、クレオパトラに其旨を傳へしめた。

けれども、アントニイの使者アリシアスは、使者として、女王の面前に立つた時、聞くにも増したる女王の美しさに、恍然として魂を奪はれ、自ら使者である地位をすら打ち忘れて、彼は女王に此の様なことを言つたのである。

「女王よ、恐れずしてタルサスに行き給へ、卿の美と才を以てし給ふならば、必ずアントニイを魅殺し、忽ち彼を征服し給ふこと疑ひなし」と。

曩に一世の英雄大シーザーを掌の中の物として、左なきだに深い自信を持つて居るクレオパトラである、デリシアスの此の言葉を聞いて一段の自信を得、終に自らタルサスなるアントニイの陣營を訪ふことにした。

シドナス河を溯つて、初めて女王がアントニイの陣所を訪ふた時の壯麗なる装束は、口にも筆にも盡し難いものであつた。

其日女王は、玉座にもひとしい燃るかと思はれる御座船に乗つて居た、其船尾

は延べたる黄金の板で装ひ、其の紫の帆の、高い香には、心なき「風」さへも戀心を起すかと思はれた程。又笛の音につれ動く銀の櫂には、心なき「流」も其の快き調に心を惹かれて、一入流を早めるかと思はれる計りであつた。さて女王が其の日の扮装を描かんには、口も筆も、餘りに貧弱と云ふの外はない。金襴の天蓋を張りたる下に身を横へた女王は、ウキナスの女神も斯くはあらずと思はるゝ許りの艶なる姿、まことに天成の美さが、人の想像力を越えたりと云ふは、斯る例を言ふのであらうと思はれた。

女王の兩の側には、鬘を渦かせたキエビツドのやうな美少年が、五色燦爛たる唐團扇を持つて立つて居る。其の快よき團扇の風に、女王の頬は一入艶かな色を添たかと思ひなざるゝ許り。海神や海女の様な數多の侍女が女王の美しい顔と眼の光りにうたれて、思はず腰を屈めて敬禮する——莊麗と言はうか豪華と云はうか世に譬ふべき例もない事柄であつた。

女王の御座船が着いたと聞いて、タルサス全市の市民は之を見んとて掛合ひへし合ひ波止場を集ひ、陣所に止まつたは、將軍アントニイ唯一人であつたとか。

斯る装を凝らして、斯る美人がタルサスに上陸した時、アントニイは、肝腎のクレオパトラを呼び寄せた問責の事などは疾くに忘れ来て、女王の美しさに、身も魂も打込んで、互に華やかな交歡に、日も足らぬ程であつたが、身は何時しかクレオパトラが掌の中の虜となつて、勤めらるゝ儘に、女王と共にアレキサンドリヤの都へ伴はるゝ事となつた。時は耶穌紀元前四十一年クレオパトラが女性美の極度に達したる二十八歳の秋であつた。

斯くて、アントニイは、女王がトレミイの宮殿に初陣し、晝は終日、夜は夜もすがら、歡樂の酒に酔ひ痴れて、國をも家をも打たれて、華やかな一日一日を

過して居る間に、思ひもかけぬ報が故郷羅馬より達いた、沙翁の物語は、其時より姪まつて居る。

『1』

アレキサンドリヤなるクレオパトラ宮殿の一室。

女王の色香に迷ひ、夢の如く華かなる一日一日を送つて居たアントニイの許に羅馬より到着した使者は、抑々如何なる報知を齎したのであらうか。使者がアントニイに齎らした報知と云ふは、彼の妻フルウキアと弟ルシヤス・アントニイとの争闘であつた。幸にして兩個の争ひは事なく終つたが、更に兩人は聯合してオクタビヤス・シーザーに對して兵を擧げた。フルウキア擧兵の目的は、今や漸く權力を得て羅馬の主權を一手に收めんとして居るシーザーに、一撃を與へ、女ながらも天下の大權を收めやうとしたので

あらうが、一敗腕くも地に塗れてルシヤスとフルウキアの兩個はペルシヤに逃れたと云ふ使者の口上。あゝ、こりや恚うしては居られぬわい、若し此の儘に空しく日を過して居たならば、我が身は埃及女王の戀の奴となつて、身も家も滅ぼして了ふであらうと漸く心付いたアントニイが、第一の使者も歸さぬ間に、又もや第二の使者が来た。アントニイは使者に向ひ、「何事だ。」
「奥方フルウキア様が御逝去なされました。」
「何ぢやと、そして彼女は何處で最期を了げたのぢや。」
「長い間の御病氣の後シチオン（ギリシヤのペロポシネサスの北東シチオニヤの市）で御逝去なされました——尚ほ何事か重大なる御用向は是に御座りませぬ。」
使者は一通の書面をアントニイに捧げる。

「可し、可、退れ」

第二の使者は行つて了ふ。

實にアントニイに取つては、フルヅキアの最期は、確かに驚くべき報知であつた、以前は、フルヅキアさへ居なければクレオパトラと、天下晴れて一つになれるものをと、思はぬこともなかつたが、さて、死んだとなれば、流石に彼の胸も傷むのである。

「あゝ高邁なる心を持つて居たものは、終に死んで了ふた——。一度は慥にこともあればよいと思ふたが、幾み棄んと厭ふたものも、いざ夫を失ふたとなれば、再びそれを恢復し良い心地がする——。目前の變化も事態の變化に伴ふて、今は苦痛となつて了ふた。あゝ死んで見れば、フルヅキアが、自己に盡して呉れた功勞も思ひ當る。そして早く死んで呉れ、ばいゝがと、彼女の死を急がした手も、今は喜んで退き度いと思ふ——。俺は此の人魅はしの

女王の所を、一日も早く出て行かなくちやならぬ。俺の懶惰からして、俺の知つて居る禍に、幾万倍した災難を招ねかぬとも限らぬ——、おい、こりやイノバース！

アントニイは我が腹心の家来イノバースを呼んだ。

「將軍何御用で御座います」

「俺は、急いで此の土地を去らなくちやならん」

「爾うなれば、此處の女達は、悲みの餘り、死んで了います、無情と云ふ事位、女に取つて致命の傷はありませぬ——、若し吾々が此處を發つならば、女達は屹度死んで了います」

「俺は行かなくちやならん」

「慥に犠牲を拂つても、惜むに足らぬ場合ならば、女達を死なさせるが宜しう御座います、けれども將軍、女達をむざ／＼と棄て、行くことは可愛い相

でなりません、假令んば、彼女どもに代られぬ一大事であるにいたしまして
も空く棄てることは、何とも傷はしうてなりません。クレオパトラ様が、此
の噂をチラとお耳にせられた許りでも、屹度直ぐに死んでお了いなされませ
う。マ前は女王がもそつと些細ぬ事で、氣絶なされた事を二十度もお見掛申
したことがあります。手前の考へますには、「死」と云ふものには、あの方
を惹つける強い戀の力があるので御座いますから、女王は、屹度喜んでお死
になさるだらうと思ひまする」

「それは、人の意料もつかぬ女王の詭計だ」

「將軍、それは酷いお話で御座います、あの方の愛情は正真正正銘、混り氣の
ない、心底の戀より外には、何も御座りません。外々のものには、唯の溜息
唯の涙と思はれることも、あの方には、風とも雨とも思はれます。事實、曆
に記されてあるよりも、一層恐ろしい暴風雨で御座います、恁麼な情熱の暴

風雨が、何うしてあの方の術なんて御座いませうか。若し本統にそれが術策
でありとしますれば、女王はジョーヴ（ギリシヤの主神）と同じやうに驟雨を
お降らしなさることも出来ませうに。」

「あゝ、俺は此の世で、あの人に遇はねばよかつた」

「若し爾うならば將軍、閣下は、大傑作をお見落しなされたて御座いませう。

世界の旅をなさる閣下が、これ程のものを見ないとあつては、御名折で御座

りませう」

「實は、妻のフルヴキアが死んだのぢや」

「え！」

「フルヴキアが死んだのぢや」

「フルヴキア様が！」

「死んだのぢや」

「もし爾うならば、閣下は神に感謝の犠牲をお献げなされませ、男の手から妻を取り去ることが、若しも神意であるならば、それは、神様が恰度裁縫師のやうに、舊い着物は着破られても、未だ新しい着物を裁縫する材料があると云ふ、慰藉の保證をなされるので御座います——、若し假りに、世間には、フルヴキア様より、外に女がないと云ふことならば、それは、閣下に取つて確に打撃で御座いませう、それこそお慰傷を申さねばなりません。けれども此の悲は、慰を以て飾られて居ります、舊い襦袢は、新しい下袴に成つたので御座います。此の悲に流れる涙は、玉葱の香で、出た涙と同一で御座いませう」(スモツクもベチコートも共に女の着るもの、古き妻の新き妻となりたる意)

「フルヴキアは、國家の大事に口を穿けて行つたのだ、それを始末するには、俺の力が要るのぢや」

「此の地で閣下が口をお穿けになりました事件も、閣下がお在でなくば、處置が付きませぬ、殊にクレオパトラ様に關はることは、閣下でなければ手に終へませぬ——」

「えい、もう無益ぬ問答をするな、部下のものに、俺の考を知して居け、俺は此の火急な問題の原因を打明て、女王に暇を仕やう。唯フルヴキアの死だ事前りではない、俺の切なる感が、俺に迫るのだ。又羅馬に居る多くの同志からの書面にも、故郷に歸れと云ふ切なる希望ぢや。ことにセクメタスポンベイ(大ボンヘイの子)はシーザーに職を挑み海上に勢力を振つて居る。あの浮蕪な羅馬の人民、あの功に酬ひる事も出来なくなるまで、功に酬ひやうとはせぬ羅馬の人民は、曾て大ボンベイ(大シーザーの政敵、母の元勳)に寄せた總ゆる尊敬の念を、今、其の子の小ボンベイに寄せんとし居る。素より彼は、名聲と勢力に於て、世に知られた男だが、武將として、其の勇

氣と其の剛膽なる點に於ては、一段と傑出して居る男ぢやから、彼の野心を防がなければ、羅馬の一族は危殆に瀕すると云ふもの——。だが、水に浸された馬の毛の様に、活力は持て居るけれど、未だ蛇の毒は在り居らぬ——。こら、イノパーバス、俺が此處を去るに就ては、もう一刻も猶豫して居られぬと云ふ、俺の考を部下の者に傳へて呉れ、馬の毛を水に浸してをくと蛇になるに云ふ傳説あり」

「委細承知しました」

アントニイの心は決した、此の埃及を去るに就いて、今は唯だクレオパトラの許を求むるのみとなつた——。果して女王は快くそれを承諾するであらうか。

IIのII

クレオパトラ宮殿の他の一室。

女王クレオパトラは、しも侍女に向ひ、アントニイの様子を瀕に尋ねて居る

「ねえ、チャーミアン、アントニイ様は何處に在しやるのだらう。何處で、何れと、何をして在しやるのだらう。お前はね、妾に命令されて来たとは言な

いで、密と様子を見て来てお呉れ、若しもあの方が悲し相にして在したら、妾は樂し相に踊つて居ると言つてお呉れ。若しも嬉し相にして在したら、妾

が急病だと申しあげて、すぐと引返して来てお呉れ」

女王が侍女と一言二言言葉を交して居る間に、噂のアントニイは女王の室へ入つて来た、それと見たクレオパトラは、

「アントニイ様、妾は病氣で御座います、氣分が悪ふてなりません」
「では、私の思料も、口に出しては申されませんか——」
「ねえチャーミアンや、妾を連れて行つてお呉れ、恁麼苦痛みを、静と辛抱し

ては居られぬ、跡がそれに埒られぬから——」

「これ、女王——」

とアントニーが言つても、クレオパトラは不興な態度で、

「何うぞ、妾の傍に寄らないで下さいまし」

「何うなすつたと云ふのです」?

「あの妾は、閣下に善いお消息があつたことを、そのお顔で讀んで居ります

あのフルウキア様が、何と言ふてお越しなすつたのですか、ねえ早う行

つてお進なされませ。あの方は、閣下の此處へ來つしやることを、御承諾な

すつたのぢやないから——。妾が閣下をお引留め申して居るやうに、言は

せないで下さいまし。そりや、妾には何の力もないのぢやもの、閣下はフル

ウキア様の物ですから——」

「いや、神々も御照覽ある筈です——」

「恁麼恐ろしい僞隣に遇ふた女王が、世の中にあるでせうか。でも、妾、初手

から、妾に對して好詐のあることを覺つて居りました」

「これ、何を言ふのだ、クレオパトラ——」

「たとひ、閣下が、神々に、どの様な激しい誓ひをたて、神を驚かしなさる

とも閣下が、妾に信實ぢやとも、又妾の物になつて在しやるとも信じられま

せん、閣下はこれまでにフルウキア様にさへも、信實では無つたぢやありま

せんか。守ることも川來ぬ口先の誓を破つて、自ら禍を身に受けることは、

本氣の沙汰では御座いません」

「これ、女王——」

「否え、もう託言は被仰つて下さいまするな、それよりは、暇を告げて、お出

發なされませ。それとも若し此處に留まりたい御思召しならば、被仰つて下

さいませ、そしてお引發になることは、何うぞもう言ないで下さいませ。若

しも閣下が誓をお守り下されば、唇にも、眼にも、眉毛にも、無窮の命が留まりませう、そして妾等の五體は、皆んな天より授かつたものとなりませう——。それとも、世界の大将軍と云はれる閣下が、世界中での嘘言者と言はれやう御心で御座いますか」

「女王、まあ私の言葉を聞きなさい、刻下の危急が、一時私の体を要して居ります、けれども、精熱に満ちて居る私の心は、信貴婦と一緒に残つて居るのです——。今や、我が伊太利は、内亂の劍光によつて輝き、セクスタス・ボンペイの軍は羅馬の港に迫り居ります。二個の同じ勢力は、騒亂を生ずるに極つて居るのです。曾ては、弱きが故に唯單に憎悪されて居たボンペイの黨與も、今は強大となつて却て歡迎せられ、曾ては耻辱を受けて居たボンペイも、父の名譽により尊敬せられて、愚民共の心を得て居ると云ふ始末、これとて多數となければ別に危険至極です。それに近頃のやうに靜く計りして

居ては、終には倦怠疲勞して了ふに極つて居りませうが、それも境遇の變化に伴れて癒ると思ひます。殊に、私一個人に關しては、御心配は御無用です——、妻のフルヅキアは死んだのですから——」

フルヅキアが死んだと言ふを聞いても、クレオパトラは、それを心底より信ずることは出来なかつた。

「假令妾が、思慮分別のある驕頃にならぬと云つても、フルヅキア様がお亡になりなされたなぞと、其の様な小兒らしいことが、何うして信じられませう——。いや、女王、信實フルヅキアは死にました、これ此の手紙を御覽なさい。貴下のお氣の向いた時に、それを讀んで氣分を晴して下さい、終に都合よくなつたのです。——何時、何處でフルヅキアが死んだのか、その手紙を御覽な

さい——」

「それは嘘の情といふもの！ 悲しい涙をお溜めなさる涙壺は何處にあるので

御座いまする！。フルグキア様が御不幸の報知をお受なされた下下の御様子で、妾の死んだ報知を御受とりになる時の事が、思ひ合はされまする」
 「もう那樣な攻撃は止めて、私の打明けやうとして居る所存を聞いて貰ひ度い。貴女の忠告一つで、私は其を果すなり、止めるなり、何れへなり決定を與へる心算です。私はあの、ナイルの泥土を肥沃にする太陽を指して誓います、貴女の下僕であり、貴女の兵卒であるこの私は、斷然此處を出發します、そして、和睦なり、開戦なり、何れなりとも、貴女の言ふ儘に仕なさうよ」
 「チャーミアンや、私は呼吸も塞り相だよ、さア、お出！でも心配しないが可い、直きに不快くなるけれど、直に又快くなるのよ、——アントニイ様の御愛情も恰度その通り——」
 針のやうな、女王の言葉聞いて、アントニイも黙つては居らぬ。
 「これ、女王、御待ちなさい。貴女はアントニイの信實に對して、正直な證據

を出してお澄りなさい、アントニイの信實は、貴女の吟味に堪える資格があるのです」
 「——傍をむいて、奥様のために泣いてお進げなされませ、それから妾に暇を告げて在しやいませ。貴下の涙は私のためではなく埃及と云ふ國のためにお流しなされるので御座りませう、——ねえ、貴下、貴下が、さも信實らしく思はれるやうに、模倣をして、一狂言なされる所を拜見さして戴きませう」
 流石にこれを聞いてアントニイも憤然とした。
 「貴女は私を立腹させる、もう言はないで貰いませう」
 「慥然ことは月並ですわ、貴下は一段巧いことをなされませう」
 「いや、私の劍にかけて誓います——」
 「——劍許りでなく、楯にかけても御誓いなされませ。——ねえ、チャーミアンや、あれはてれかくしを仕て在しやるのよ、したが、本氣になれば、もつと

巧いことをなさるのよ、ねえ、チャームミアンや、此のヘラキュラス子（アントニイは希臘の勇士ヘラキュラスの子、アントニイの後裔なりと）が、何んなに巧く、思ふたやうな狂言をするか、見て居て御覽よ」

アントニイは、心より怒つた様子で、一言も言はずして行きかける。

「では、女王私はこれでお暇しまする」

「まあ待て——、唯一語言はして下されませ、——貴下と妾とは何うしてもお別れせねばなりません、なれども妾の言はうと思つて居ることは其のまゝでは御座りません。——貴下と妾は、互に思ひ合ひました、——けれども、妾の考へて居ることは、その事では御座りませぬ。貴下はよく御存知で在しやいます答で御座ります、——妾の言ひ度いと思つて居ります一つの事は——あゝ、妾の忘れやうと思ふ事はアントニイ様の事で御座ります、そして妾はもう皆な諦らめて了ひませう」

「けれども、若し貴女が平氣で居ることが出来なければ、私は貴女を急氣地のない女だと思ふ——」

「那様に平氣で居ることは、随分努力な事で御座いますわ、何うしてそれが此のクレオパトラに出来ませうか。——ねえ、貴下、何うぞお許し下さいまし、妾、自分で美しいと誇つて居りますことも、それが貴下のお眼にお嫌に見えるならば、妾に取つては苛責で御座いますわ。兎に角、貴下の御名譽を保つためには、貴下は何うしても此の埃及をお出發にならなければなりませんわ、ですから貴下は、妾のお哀願などには耳を借さないで、お出發なすつて下さいまし。神々様は、貴下をお護り下さいますでせう、貴下の劍は捷利の譽で飾られるで御座いませう、幸いな成功が貴下の前に撒き散されるで御座いませう」

「流石にクレオパトラも、別れに臨んでは、その一言一言も血を吐く思いであ

「では、行ききす——。けれども、私達は別れ別れになつて、假令西東に居やうとも、又貴一の體は此處に恙うやつて残つて居やうとも、心許りは私に付き添ふて居て呉れると思ひます、假令又私の體は此處を離れて行かうとも心は貴女と一緒に此の埃及に残つて居ります。女王、さらばですぞ！」
 兩個は、終に怎んなにし別れて了つた。別れて後に、何のやうな變化が兩個の身に起らうとは神ならぬ身の知る由もなかつた。

III

羅馬に於けるシーザーの館

羅馬の館では、三軍政治に臨はるオクタビヤス・シーザーとレビダスの兩將が、アントニイの行爲に就いて、今日も今日とて互に議論を闘はして居る。

シーザーは、アントニイが埃及へ行つて、クレオパトラの色香に迷ひ、羅馬の大將軍である身をも打ち忘れ、歌舞燕遊に口も足らぬことを攻撃すると、寛厚なレビダスは、

「我輩は、彼の過失が、その善行を全然蔽ふて了ふとは思はぬ、アントニイの過失は恰度夜の暗に遇ふて初めてはつきりと判つて來た星の光のやうなもので、祖先よりの遺傳ぢやから何とも致し方がない」

と答へて、寧ろ辯護する傾である、するとシーザーは、レビダスに向ひ、それは餘りに寛容であると前置して、かれアントニイが、クレオパトラ女王と相じて一國の光榮を汚せるのみか、或は賤しき奴隸共と膳を共にして食ひ、又は酔ひ痴れて街を練り歩き、或は賤しき僕の装をして微行歩きするなど、其他彼が高位高官の人にもあるまじき振舞をあげて、非難攻撃して居ると、其處へ一人の使者がやつて來る。

使者は、ボンベイの消息を齎らして来たのである。
使者の言ふ所によれば、彼ボンベイは、メネクテス及びメネスと稱する二名の有名なる海賊を部下とし、總ゆる船に帆をあげて、伊太利に侵入せんとして居る、これがために、商船は一隻も多海に出る勇氣もなく、人民どもは、事實上以上にボンベイの名を聞いて慄へ上つて居ると云ふ。
茲に於てかシーザー、レビダスの兩將は水陸共に兵を進めて協同して敵に對すべきことを約す。

『I』の四

アレキサンドリヤなるクレオパトラの宮殿

戀しく懐かしのアントニイに別れたクレオパトラ女王は、何のやうな思ひをし

て其の後の朝夕を述して居られるのであらうか。

女王は今、侍女のチャイミアンを呼んで、マンドラゴラと云ふ藥草より採つた麻睡藥を持つて來よと命じて居られる。

「陛下様、それは、何のために御座りまするか」

「若し出来ることならば、アントニイ様がお留守の間、眠つて居度いと思ふて

「陛下様、貴女さまは、餘り思ひつめて在つしやいまする」

「失禮なことを言はぬが可い」

「否え、爾うでは御座いません」

クレオパトラは宦官のマアチアンが傍近く居るのに眼を止めて、

「これ、マアチアンや、妾は、其方の歌は聞き度うない。ねえ、チャイミヤンや、お前はあのお方が、今頃何處に在しやると思つてお出だえ、あの

方は今立つて在つしやるだらうか、坐つて在しやるだらうか、それとも歩いて
 在つしやるだらうか、馬に乗つて在しやるだらうか。おゝアントニイ様を
 お乗せ申す幸福な軍馬！ お前の精一杯な力をお出し。お前はアントニイ様
 を乗せて行く事が出来るのだから！ 此の世界の半を擔つて立つ神様（デミ
 アトラス）とも、人の中の一番豪勇な方とも云はれて居るアントニイ様をお
 乗せ申すのだから——、あの方は今何か話して在つしやるだらうか、それと
 も、「古いナイル河の蛇は、處（クレオパトラのこと）に居るだらう」などと、
 眩やいて在しやるだらうか……、あの方は妾の事を何時も爾う言つて在つ
 したわ。けれども今はあの方が在しやらぬから、妾は、以前よりも苦しい思
 ひをして居るの、恰度、恐ろしい毒で我が身を養ふて居るやうに。あの方は
 燃るやうな太陽（原本には Phoebus といふ神の名）の光で、日に焦けて居る妾
 の事を考へて在しやるのか知ら、深い皺を顔に刻まれて居る妾の事を考へて

在つしやるのか知ら。あゝあの額の廣い大シザーが未だ此の世に生有へて
 居られた頃は、妾はあの方に取ては寵愛せられたものだつた、又あの大ボン
 ペイも立ち止まつて、その眼を側へ向ける事も出来ないやうに、妾の額を激
 乎と噴めて居た。そして、その生命とも云ふべき妾を噴めながら死んで了ひ
 相であつた。

クレオパトラが大シザー、大ボンペイ存生中の事を思ひ出すにつけても、世
 の状態や我が身の上の變り果た事が、今更のやうに、しみじみと思はれるので
 ある。以前はシザー部下の一武將であつたアントニイが、今は世界の主人と
 も言はれん許りに成て居るのみか、自分の身は、現に其の人と戀中に陥ちて片
 時たりとも忘れられぬ身となつて居るではないか、あゝ何と云ふ我が身の變り様
 であらうぞ。
 恰度その時、アントニイの許へ使者として派遣した家來のアレキザスが歸つて

来た。

「陛下、御機嫌は如何で御座いますか」

「お、歸つておられたか、そしてアントニイ様の御様子は何うであつた」

「陛下、あのお方は、此輝やく眞珠に、最後の接吻を、氣度となく繰返してな

されました、これを陛下にお渡し申してくれと仰せになりました、又あのお方

の仰せになりしたお言葉は、手前の胸に明晰と残つて居りまする。」

「では、それをよく聽ませう」

「あのお方は、手前に向つて恚んなに仰せになりました、「君、言つて呉れ給へ

埃及の女王に、此の忠良なる羅馬人(自分の事)の此の眞珠を献上しやう、此

の微少ぬ贈物ものを附添へて献上した上王國を以つて女王の豊なる王位を、

更に強大ならしめやう。東方諸國は、屹度あのを女を君主と呼ぶだらう」と、

爾う仰せになつた後、手前に御會釋を遊ばして、威風堂々と若々しい軍馬に

お乗りになりました。」

「それで、あのお方は悲し相に仕て在つしたか、それとも嬉し相に仕て在した

か」

「一年中の隠和な氣候のやうに、悲し相にも、嬉し相にも仕ては在つしやいま

せてした」

「そして、其方は、妾の使者のものにお遇であつたか」

「はい、二十度からのお使者に遇ひました、それにしても陛下には、何故あの

様に追かけ、追かけ使を御遣しになりました」

「若しアントニイ様にお使をするのを忘れる様な日が來たら、それこそ大變だ

わ、若し那樣な日が來て、那樣な日に産れるやうな兒があつたら、乞食にな

つて死んで了ふが可い。さ、チャアミアン、筆と墨を持つてお來、ねえ、チ

ヤアミアン、妾はあの大シーザーでさへも、これ程に思ひは仕なかつたねえ

……さ、筆と墨を持つて来てお呉れ、若し妾、アントニイ様へ御消息をす
 る事が出来ない位ならば、此の埃及の人民を皆な滅ぼしてもかまひは仕ない
 わ。」

【III】の 一

今や、小ボンベイが羅馬の邊海に勢威を振つて居るにも拘はらず、兄弟塔に聞
 くは國家を危ふする所以であるから、老巧なレビダス將軍はシーザーとアント
 ニイの世だを調停したのであるのみならず、レビダスは、一策を考へ出して、
 シーザーの姉オクタビアをアントニイ將軍の後妻にすることに幹旋極力した。
 此のオクタビアと云ふはカイヤス、マルセラスの未亡人で、賢婦人と呼ばれて
 居る婦人であつたから、弟のシーザー將軍は常々より殊の外姉を敬愛して居た

然るに今、レビダスの周旋に依り、此のオクタヴィアは、アントニイの後妻と
 決することになつた。

斯くすれば、羅馬の雄雌は、戦理の兄弟になり、將來内亂等の憂も除かれる
 次第であるから、シーザーもアントニイも、又、當のオクタヴィアも、此の上
 結納な事はないと思つて、終にアントニイ十九歳の時、此の賢良な美人と政略
 的結婚を取り結んだのである。

案より、世間では、アントニイ將軍にクレオパトラと云ふ公然の情婦があると
 云ふ事を承知は仕て居れど、法律上から云へば、此の結婚は正當な事である
 から、此の結婚に依つて、シーザー、アントニイ兩家の平和は長く維持せられ
 羅馬の前途は洋々たる春の海やうであると思ふて居た。
 けれども、此の報知が若し埃及なるクレオパトラ女王の耳に入つたら、何うで
 あらうか、その恨み、其の憤り、決して今から想像するに困難ではないので

ある。

FILM 11

女王クレオパトラの宮殿

アレキサンドリヤなる女王の宮殿にはクレオパトラ女王が、今も侍女のチャーミアンやアイラスや、家來のアレキザス、宦官のマアチャンなどを傍に置いて、アントニイの噂をして居る。

「……チャーミアンや、妾はもう気が變つた、妾にはもう、音楽も興を盡かぬ、妾は川へ行つて釣を仕ませう、妾の曲つた釣が、ぬら／＼した魚の腹に突さゝるであらう、妾が、その魚を釣上げた時、妾はそれをアントニイ様だと思つて、爾う言ふてやりませう、「あゝ、妾、貴下を生捕つて終まつたわ」

シヨボロシヨシヨシ

！と

侍女のチャーミアンは、それに相槌を打つて、

「ほんに、貴女様が、アントニイ様と、釣の賭事をなさいました時は、面白可笑う御座いましたわ、潜水夫に、水を潜らして、河には居ない海の魚を、密とアントニイ様の釣にかけてお値なさいました、それを知らずに、アントニイ様が、一生懸命にお上げなさいましたい。

「爾う爾う、あの時の事だつたのねえ、妾が夢中になつて笑つたのは。そしてあの晩妾は、散々笑つて、あの方を面白がらせてお逃げ申した、それから其の翌朝は、妾、九時にならない前に、あの方を酔はして、お腹せ申したわ。そして其時、妾の冑被とマントルをあの方に着せ申して、妾自分では、あの方のフキリパンと云ふ長い刀を佩して試たわ。」（フキリパンと云ふ刀の名は、ブルーダスを破りしフキリビの勝利を記念するため命名せしもの）。

恰度其時羅馬から使者が到着した。

「何！ 羅馬からの使者ぢやと？ さ、早う妾の耳へ善い音づれを傳へてお呉れ。あゝ思へば長い間、何のお消息もなかつたことねえ」

使者は戦々として、

「女王様、女王様——」

「若しも、アントニイ様が、お薨りなされたとしても言ふて見や、妾は死んで了ふから——。けれども、若しもあの方が機嫌よく在つしやると言ふて御覽、それ、其處には御褒美の黄金。それ此處には、お前に接吻さして進る妾の白い手がある。此の手は、世界の王様達が接吻なされた手じや、慄えながら接吻なされた手ぢや」

「女王様、共づ申し上ますことは、あのお方様の御健勝なことで御座います」

「おゝ、それならば、それ、又褒美……、若し其方の言ふ通りならば、妾は

黄金を注して、お前の咽に注ぎ込みませう」

「女王様、何うぞお聴き下さいませ」

「さ、お話し、聴きませう……、けれども、お前の顔には、善い兆が見えぬ

若しアントニイ様が、まこと御健勝で在しやるならば、善い音づれを述るの

に、其の溢面作つたお前の顔が、不思議ではないか、」

「女王様、それでも、お聴き下さいまするか」

「若し、アントニイ様が、御健勝に在しやるのみか、シーザーと和親をお結び

なされて、捕虜の恥を受けて在つしやらぬと云ふ事ならば、妾はお前に、褒美

の黄金を降らしませう、計球の雨を注ぎませう」

「女王様、殿様は御健勝で在つしやいます」

「それはお目出度い……」

「そして、シーザー將軍と御和親をお結びなさいました」

「ほんに、お前は正直ものぢや、よく言ふてお呉れた」

「眞實、殿様は、前よりもシーザー殿と御和親になりました——」

「よう言ふてお呉れた、さ、何なりと、褒美を望んでお呉れ」

「けれども、女王様——」

「妾は、その「けれども」が嫌ひ、その言葉が、今までの善い消息を、昔んな打消して了ふわ、あゝその「けれども」が嫌だ……、その「けれども」は、恰度囚人を連れて来る獄卒のやうぢや。お前、何うぞ、善、悪、何れなりとも、昔んな直ぐと話してお呉れ……、お前はあの方がシーザー將軍と親しくなり

そして、御健勝で、自由なお肺と云つたてはないか——」

「はい、全く御自由で在せられますが……、あゝ此の様なことは申し上げられません……、實は殿様にはオクタヴキア様と御結婚なさいました。」

「あゝ、チャームミアンや、妾の顔は蒼白ではないかへ、」

けれども、使者は尙も言葉を續ける。

「女王様、殿様は、オクタヴキア様と、御結婚なさいました」

「えい、此の阿呆めが、疫病にでも罹つて死んでお了——」

クレオパトラは、使者の男を打つ。

「女王様何うぞお許しを願ひまする」

「ええ！ 何を言ふのぢや？ 出て行け！」

女王は再び使者を打つ。

「畜生め！ お前の眼のくり玉を、蹴球のやうに蹴りつけてやるぞ、此の髪の毛を引抜いてやるぞ」

クレオパトラは使者を捉へて引摺出す。

「鞭で打つて、灰汁の中に浸けてやるぞ鹽水の中に押込んでビリ／＼さしてやるぞ」

「女王様、御報は手前が持つて参つたので御座いますが、殿様の御縁組は、手前の故では御座いません」

「爾うではないと言ふてお呉れ、爾うすれば、妾はお前に領地を遣やう、そして、お前は前になれば善いではないか、——お前は打たれたのだから、それで妾の胸は癒た。さ、何でも欲しいと思ふものがあれば、與げやうか

ら——」

「女王様、眞に殿様は御結婚なさいました」

「已れ！ 呼毀の根を止めて呉れる！」

女王は懐劍を抜ひて、使者を突かんとする。

「お助けなされて下さいませ、女王様、手前は何の罪を犯したのでも御座いません」
使者は驚いて逃げ去る。

侍女のチャーミアンは驚いて女王を引止め

「女王様、何うぞお止下さいませ」

「罪なき者ぢやとて、天の怒を免かれることは出来ぬ。あの罪なき者ぢやとて又妾の怒を免れる事が出来やうか、あゝ今こそ此の埃及もナイル河の底に沈んで了へ！ 有と總ゆる善き生物も、總て意地悪き蛇に化つて了へ。これ

チャーミアンや、先程の阿呆奴を、もう一度呼んでお呉れ、假令妾が狂人になつて居やうとも、もう傷めはせぬ、さ、早う呼んでお呉れ」

「女王様、あの男は参ることを恐れて居りまする、」

「否え、もう二度と傷めはせぬ」

チャーミアンは、以前の使を召ぶために、部屋を出て行く。

「妾よりも賤しい者を打つ資格はないのだわ……我と妾が身を、アントニイ様の、戀の奴と仕たからには——」

女王が獨語を言つて居られる所へ、チャーミアンは以前の使者を連れて来た。女王はそれを見て、

「これ、お前は假令正直でも、不吉の消息を持つて參る事は、決して善い事とは言はれぬぞえ。」

「でも、女王様、手前は唯義務を盡したと云ふだけの事で御座いまする。」

「あの方は結婚遊ばしたの？ 若しお前が爾うだと言つたとて、此の上お前を憎みやうはない。」

「女王様、殿様は御婚禮遊ばしました。」

「神々様が、お前の氣を轉到さしてお了ひなされた、お前は、未だその様な事を言ふて居るのかえ。」

「女王様、手前は決して嘘偽りは申し上げません……殿にはオクタヅキア様と御結婚遊ばしました。」

使者の報知は、動かすことの出来ぬ事實である。——さて應々爾うと知れて見れば、クレオパトラの胸は新らしき傷から新たに血の流れ出る思ひである。

「あゝ、早く此處から連れて行つてお呉れ、妾は氣絶して了ふ、これ、アイアスやチャーミアンや！ ……けれども心配仕ないでも可い。アレキザスマ

あの使者のものに言ふて、オクタヅキア様の容貌から年齢、嗜好から髪の毛まで、漏なくすぐと知らせて呉れるやう、傳へてお呉れ。」

家來のアレキザスは女王の旨を畏んで御前を退ぞいた。女王は殊んど倒れかゝる計り、力なげに、

「チャーミアンや、もう何にも言はないぞ、お呉れ、そして、妾を部屋へ連れて行つてお呉れ。」

【III】の二
ポンペイとの和睦

有名な海賊、メネス及びメネクラテスを部下として羅馬の近海を荒して居た小
ポンペイの勢力は、中々猖獗で、島波と手に終へ相もなかつたので、シーザー、
アントニイ、レピダスの三執政官は、彼と會見した上、三人の同盟にポンペイ
を加へることになる。

さて、愈々四人の豪傑は、ミセナの海岸に於て會見した末、ポンペイが海上の
賊を平げ、其の管轄の許にあるシシリイ島の麥を羅馬に供給すると云ふ條件の
下に、ポンペイには、シシリイ島、コルシカ島、サルジニヤの領主權を認め
て、目出度く會合を終る。

恁麼にして羅馬國は四人の豪傑により、領土を四つに分けられ、暫しの間は平

ラトバオレクとニニアン

和を保つことが出来た。

【III】の一

アントニイはポンペイとの會談が終つた後、間もなく、自分の部下の將、ヴェ
ンチダアスと云ふを、自分の領地亞細亞に遣つて、自分の行かぬ前に、先づ其
の地方の賊徒を討つて置くやうにと命じた。

ヴェンチダアスは、ラビエナスを遣ひ、パコラスをユーフラチス河の畔まで追
ひ退けたが、終に彼を討ち亡ぼして了つた。

其當時アントニイは、妻のオクタウキアを伴ふて希臘のアゼンスに行くことゝ
なつた。

【III】の二

羅馬なるシーザー館の前坐敷

ラトバオノクニトニア

四人の會議が終つて、間もないことである、シーザー部下の將アグリッパと、アントニイ部下の將イノバースが、互ひに語り合つて居る。

「何、それでは、御兄弟(アントニイとシーザーのこと)には、お別れになりまするか、イノバース殿」

「御三方にはボンベイ將軍と和睦をなされたが、ボンベイ將軍は、直ぐと御出發、後の御三方は、今調印を仕て居られます。聞けばオクタヴキア様には此羅馬を離れるのが悲しいとて、泣いて居せられるとやら、またシーザー將軍も、悲し相な御様子、又メネス殿(ボンベイの將)の言はれるには、レビダス將軍には、御酒宴から後、何となく打ち擧いで居られると聞きます」

此處で兩個は、シーザーとアントニイ兩將軍の中、レビダスが何らを餘計に敬愛して居るかと言つて、互に論じ合つて居たが、恰度、其處へ、シーザー、アントニイ、レビダス、オクタヴキアの四、人入つてくる。

「いや、もう何うぞ、お扣へ下されい、とアントニイが言へば、シーザーは、
「實下が姉をお伴れなさるは、拙者の體の大半を持つて行かれると同じぢや、姉を愛して下さるは、とりもなほさず、拙者に對して敬意を表せらるゝと同じこと——」

「御氣遣ひは御無用で御座る、拙者を御信用下さらぬことは、拙者に取っては不快千萬なことと御座る」

アントニイは、シーザーに向ひ、斯くまでに言つた。

シーザーとオクタヴキアの友愛は、實に切なるものがあつたので、兩個が別離の様には、流石に並み居る勇將も同情の涙を禁め得なかつた。

斯くしてオクダヅキアは、アントニイが愛の腕に抱かれて、希臘はアゼンスの都へと船出したのである。

【III】の三

アレキサンドリアなるクレオパトラの宮殿

女王の傍には、今日も侍女のチャーミアンとアイラスと、家來のアレキザスが侍従て居る。

「アレキザスや、使者の者は何處に居る」

「女王様、彼奴は連れて、よう參りません。」

「何の阿呆らしい、……早く此方へ連れてお出さ」

以前と同じやうな使者の者、おづ／＼と入つて來る。

「こりや、近うお参り、其方はオクダヅキア様を見たか」

「はい」

「何處で見たの」

「羅馬でお目にかゝりました、シーザー將軍とアントニイ様の間に、手を引かれお在なされました」

「あの方は、妾のやうに女がお高いかえ」

「いゝえ、お高かうは御座いません」

「話してお在て遊ばすのを聞いたかえ、——鋭いお聲か、それとも低いお聲かえ」

「はい、低いお聲で御座いました」

「鈍い聲なら、アントニイ様には長うは好かれはせまいよ」

それを聞いたチャーミアンは、

「那樣では、殿様に好れ相もないわねえ、アイラス」と、朋輩を顧みる。すると、

「妾も爾う思ふよチャミアン」

爾う言つて女王は、更に使の者に向ひ、

「鈍聲で、背が低ふてはねえ！。それでも歩き方は嘸御立派であらう。御立派に見えたか、思ひ出して御覽！」

「否え、匍ふ様で御座いました、歩き姿も立姿も、一つの様に見えました、活

きたものと云ふよりは死んだ者のやうに見えました、呼吸をして在しやると

云ふよりは、木像の様に見えました」

「眞實にその通りなの」

「若し、其の様で無いならば 手前には、物を観る眼もないと云ふもので御座いまする」

「それ程に見て取るものは、此の埃及に三人とはあるまいよ」と侍女が言へば女王は、

「ほんに、お前は聡明い男だわねえ、それから齡のころは、お幾歳位であつた」

「オクタヴキア様は未亡人様で御座います」

「まあ、未亡人様だと？チャミアン、聞いたかえ」

「手前は、三十歳位とお見かけ申しました」

「顔は何うであつた、——圓顔か、それとも長顔か」

「御容貌の庇かと思はれる程、圓顔で御座います」

「圓顔と云ふものは、大抵は馬鹿なものだわ、そして髪の色は？」

「蒼色で御座いました、そして額は思ひ切つて低ふは御座いました」

「そら、お前には、薔美のお金をやりませう、——お前は、此の前の、妾のひと

い仕方を、要ら取らぬやうにねえ、未だ、アントニイ様の御手紙も頼みませう、さ、行つて準備を仕てお出」

「ほんに、女王様良い漢で御座いますねえ」とチャイミアンが言へば、クレオパトラも、

「ほんとに爾うね、妾はあの男に辛く當つたことを、今では後悔して居るのよそれから此の男の言葉通りならば、此のオクタヴキア様は、少しも妾が嫉妬する程の事はないわ」

「少しも御座いませんとも、女王様」

「それにアントニイ様は、兎に角、これまでに少しは立派な女を御覽なされた筈だわ」

「何と彼仰やりまする女王様、御覽なされた筈ぢやなどと、滅相な。——ほん

とに、殿様は、長小前から、貴女様のお思ひ通りになつて在つしやいました」

「妾はまだあのお方に一つお願申し度いことがあるの、妾が御手紙を書いたら先刻の使者を連れて来てお呉れ」

「はい、畏まりました」

【III】の四

シーザーとの不和

アントニイが妻のオクタヴキアを連れて希臘のアゼンスに行つて居る間に、ポンペイは又もやシーザーと不和となり、例のメネメ、メネクラステの二海賊を利用して、頻りに伊太利の近海を荒し、又、豫て約束してあつた麥の輸入などは毫しも履行せず、羅馬に食料の缺乏を來たすの様なことを仕た。それのみならず、ポンペイはシーザーと二度まで海戦をやつて、二度共勝利を

占めたので彼は殆ど羅馬近海の制海權を握つて了つた。

然しシーザーも、これしきの事に決して屈する様な男ではない。部下の將軍アグリッパに命じて、急に軍艦を造らしめ、終には三十六年(紀元前)にポンペイを滅ぼし、又レビダス將軍の謀反を未然に防いで、將軍を退職せしめる迄にした。斯の様に、シーザーが内亂を無事に平定することの出来たのも、全く姉のオクタヴキアが、夫のアントニイと、弟のシーザーの間に居て、何時も英雄の間を調停して居たかゝることである。又シーザーとアントニイの間が、かく圓滿であつた、今一つの理由は、アントニイが、クレオパトラの手から遠く離れて居たためであらう。

けれども、元來、多情多感なアントニイは、賢婦オクタヴキアに憐らないで、何時かは、再び刺激の強烈なクレオパトラを思ひ出すやうになつた、その結果、

アントニイは三十七年に、オクタヴキアを羅馬に歸へし、自分は妻と云ふ束縛ある者から離れて、直ぐとクレオパトラに遇はんがために、埃及を指して出發したのである。

一度解て居たクレオパトラとアントニイの、舊い戀の糸が再び結ばれると同時に、シーザーとアントニイの、素らしい和睦の繩は切斷んとして居る。

第五

シーザーの激怒

羅馬に於るシーザー將軍の館では、今しもシーザーが、アグリッパ、メツセエナなど云ふ部下の將軍を呼び寄せて、近頃のアシトニイが奇怪千萬な舉動を非

難攻撃して居る。

「アントニイは、吾々羅馬の者を侮辱して、アレキサンドリアの都で、此の様なことを遣り居つた、一例を擧げて見れば慙うぢや。彼は、街の廣場に銀張りの壇を裝置へ、自分とクレオパトラは、其の上に登つて、金の椅子の上に腰をかけ、我が父(實は伯父)大シーザーの兒シーザリオをその脚下に坐らせ却つて、己れ等、野合の仲に産れた兒達を、兩個の間に置き、アントニイはクレオパトラを埃及、下シリヤ、サイプラス、リデアの女王に仕たと云ふ事ぢや」

「ほう、その様なことを公衆の面前で致しましたか？」と、メツセエナが呆れて問へば、シーザーは尙も言葉を續ぎ、

「人々の闘技を闘はす廣場に於て、アントニイは、己れと女の間に産れた長男のアレキサンダーを、「諸王の王」と宣布さし、これに大メサア、バルシア、

アルメニアの諸國を分ち與へ、次男のトレミイには、シリア、シリチア、フエニシアの諸國を割附ふたと云ふ事ぢや、そして其日、クレオパトラは、女神アイシスの衣装を纏ふて民衆の面前に立つたとやら！」
「斯る傍若無人の振舞を仕て居るかれアントニイの罪を、一體、何人が糾弾するので御座いますせう」

アグリツパが爾う尋ねた時、シーザーは、
「それをなすものは、此のシーザーを措いて外にないのぢや」と、暗に彼はアントニイ征討の意を漏らす。

すると、恰度其處へ、希臘からオクタヴキアが歸つて來て、アントニイのために種々と辯護し、熱心に夫と弟の間に調停の勞を執る、

けれども、その後、アントニイがオクタヴキアを離縁したために、貞女オクタ

ウキアの苦心も、悉く水の泡と消て、終に、シーザー、アントニイの戦争となる。

【VII】の六

アントニイの大敗。

シーザーがアントニイに戦を宣したのは三十二年。戦は引續いて翌年に及んだが、其年の春の初め頃、アントニイとクレオパトラはパトリイの大本營よりアクチアムの市に近い海岸に陣所を構へて居た。其年の夏より秋にかけて、戦期は漸く熟した。そして九月に入つて後、愈々天下分目の大戦を行ふ事になつたが、此の時アントニイは、自分の部下の將カアミデアスが、陸戦を主張するにも拘はらず、クレオパトラの勸める儘に海戦

を斷行して、終に大敗北を招くことになる。愈々九月の二日と云ふ日に、アクチアム市の沿海アンブラシヤ灣の附近に於て大海戦が始まつた。初めの間、アントニイの艦隊は奮戦して居たが、クレオパトラの艦隊は、頗る振はず、暫し戦つて居る間に、羅馬勢に敵し難いと見て取つたか女王の旗艦を先軍にして六十艘の船が總退却を初めることになつた。この様を見たアントニイは、何と思つたか、俄に勇氣阻喪して、未だ戦ひも半ばに達しないのに、己れの艦隊を見捨てて女王の後を追ひかけて行つた。日暮頃になると、アントニイの艦隊は、或は燒け、或ひは沈み、或ひは捕獲せられたが、それでも尙、恥を知る士卒は奮戦苦闘して退くのを知らなかつた。然るに彼等は、アントニイ將軍、自から先に立つて逃げ出し、自ら敗軍の手本を示したと聞くや、憤慨措く所を知らず、終に艦隊の大部分を擧げて、敵に降服して了つた。

然るに一方アントニイは、女王の船に追ひつき、耻を包んで埃及はアレキサン
ドリアの都に歸り着いたのである。

【III】の七

アレキサンドリアに於る女王の宮殿

醜い敗戦をして、埃及まで歸つて來たアントニイは、從者達をつれて宮殿の一
室へ入つて來た。

「あゝ！、俺が此の埃及の土地を踏んで居ることを知らして呉れるな、此の大
地は俺を載て居ることを耻るであらう。おゝ皆の者、近う寄つて呉れ。俺は
永久に自分の道を誤つて了ふ程、痴愚になつて了つた。俺は船に黄金を積ん
で置いた、お前達はそれを分配して、逃るなり、又はシーザーに降参するな

り、仕て呉れ。」

一同は思はず顔を見合はして、

「え！逃よと仰せられますか、いや、吾々は斷じて其様なことは致しませぬ」

「いや、俺が逃たのだ、俺が敵に背を向けて、卑怯な振舞を教へたのだ。俺は

お前達の手を借らずとも、行くべき道に進む心算ぢや。港には俺の寶がある

それを持つて行つて呉れ、——お前達が、シーザーに仕へるまで無事に居られ

るやう、俺が添状を附けてやらう。もう此の上は、悲しげに顔を見て呉れる

な、又それを不承知ぢやとも答えて呉れるな………船も寶も、皆お前達の物

にして、直と此處を出發て呉れ、何うぞ、今直ぐと出發て呉れ、俺にはもう

お前達に命令する資格はないのぢやから、頼むのぢや、直ぐと出發て呉れ」

恰度其處へ、侍女のチャミアンとアイラス、エロスの三人に導かれてクレオ
パトラが入つて來た。

エロス「女王様、殿様を慰めてお進なされませ」

アイラス「女王様、爾うなさいまし」

クレオ「妾を坐らせてお呉れ」

アントニイは先程からクレオパトラの來て居るのを、見ぬやうな振をして居ると、エロスは堪りかねて、「女王様が、お傍に坐つて在せられます」と注意する。

アント「あゝ、蒼蠅い！」

エロス「何うぞ殿様——」

アントニイは傍らに人なきが様に獨語を言ふ。

アント「爾うだ、彼はアキリビキの戦ひでは、劍も抜かなかつた、けれども、彼はダンスの時の飾か何かの様に劍を佩いて居た、俺があゝの瘦せた、皺くちやの方ツシヤスを撃つた時、俺が、あの狂氣のブルータスを殺した時、彼は唯軍務に従がつて居たと云ふに過ぎなかつた。實戰の經驗などは少しも無つ

たのぢや、それが今——、けれども何れの事があらう」

クレオパトラの耳には、此の獨語も聞えぬらしく。

クレオ「あゝ誰れか昧を支えてお呉れ」

エロス「女王様が……若し殿様、女王様が——」

アイラス「女王様、殿様のお傍へ行つて、話してお進げ遊ばしませ、殿様は、面目なきの餘り消氣果て在つしやいまする」

クレオ「妾を殿様のお傍へやらうと思ふならば、さ、妾の昧を支えてお呉れ、

迎も獨りでは立つて居られぬ——」

エロス「お殿様、貴下様が、女王様の御機嫌を直してお進げなさらねば、女王

様は、弱り果てお了いなされます」

アント「俺は、俺の名譽を汚して、た……これ女王貴女は私を何處へ連れ

て來たのだ、私は、私の耻辱を思ふと、もう貴女に會す顔もないのだ」

クレオ「貴下、貴下、妾が憶病にも戦から逃げて歸つたことを、何うぞお許るし下さいまし。妾は、貴下が妾の後を追ふて在しやいませうとは、夢にも、思ひはいたしませんでした」

アント「クレオパトラ、貴女は私の心が、しつかりと貴女に縛り付けられて居ることを知つて居るでせう、そして貴女の行く所へは、何處へでも引張られて行くのです、私の魂は貴方の目醒せを受けても、神々のお招きをさへ忘れ果て飛んで行くのです」

クレオ「何うぞ許して下さいまし」

アント「然し、涙一滴も滾さないで下さい、假令貴女の涙一滴でさへも、私は是までに得た總ゆるもの、又是までに失つた總ゆるものと同じ價値があるのだから——、さ、接吻して下さい、それで私は満足だ。だが、クレオパトラ私の魂は鉛の様に重い、さ、酒を持って来い、酒を！運命が吾々に非常な

打撃を與へた時、吾々は却つて運命を嘲笑してやるのだ」

【三】の八

シーザーの陣屋。

シーザーは今埃及へ陸して陣を張て居る、シーザー將軍の周圍に、部下の將、ドラベラ、サイレアス其他のものが附隨て居る、恰度其處へアントニイの使者ユーフロニアスが、シーザー將軍に會見せんがためにやつて来る。

シーザ「其方が使者の者か、近から寄つて、使者の趣を語れ」

ユーフロ「アントニイの運命を支配せらるゝシーザー將軍、アントニイが將軍に御挨拶を申上げて呉れと申しました、そして、主人アントニイは此の埃及に居住するお許容を將軍に求めて居りせする、若しそれが願はれませぬ時は、

彼はアゼンスに於いて、唯だ一平民として、居住することを願ふて居りまする、次にクレオパトラ女王は、己れの嗣子に、位を譲るべき御許を閣下に求めて居りまする。

シーザーはこれに對して愆う云ふ返答をしてやつた、それは、「アントニイの要求に對しては絶対に應ずる事は出来ぬ、けれども、クレオパトラの方は、若し女王がアントニイを埃及より追ひ拂ふか、又は、アントニイを殺すならば、その要求も亦聽入れてやらう」と云ふのであつた。

愆う言つてシーザーはアントニイとクレオパトラの使者を返へした後、自分の部下よりサイレアスと云ふ男を撰んで、クレオパトラ説得のため、アレキサンドライアの宮殿に差遣すことになる。

クレオパトラの宮殿では、女王がアントニイの部將イノバースを手に、か

のアクチアムの敗戦に就いて話して居る。

クレオ「これイノバース、今度の敗戦は、妾が悪いのか、それともアントニイ様が悪いのか、それを聞かしてお呉れ」

イノバースはアントニイ服心の家來である、けれども、今度の敗戦に就いては、アントニイを辯護する餘地がなかつた、

イノバ「それはアントニイ將軍がお悪いので御座います、閣下は自分の理性と云ふものを、意志の前に服従さしてお子ひなさいました。假令貴女様がお逃

なされたとして、それは決して御無理では御座いません、あの大戰には、青勇

十でさへ、恐ろしさに震え上つた程で御座いますもの、けれども何故將軍が

お逃なされたか、それが不思議でなりません——、女王様の愛情にほだされ

兼まする、兎に角、大將軍の敗走を見て、呆れ果て居る自分の艦隊を舐して女王様の尻を追ふてお逃げなされたことは、戦に敗けた耻辱より以上の耻辱で御座います。

イーバーバスが辨様に言つて居る所へ、女王より差遣はした使者のユーフロニアスが歸へつて来て、使の趣きを復命する。それが御前を去ると引違ひにシーザの使者サイアレスが、案内されて入つて来る。

シーザの使者サイアレスが女王に言つた口上は次の通りであつた。

女王陛下が、アントニイ將軍と是まで御一緒に在したのは、心よりの愛情からではなく、全く恐ろしさの餘り、彼の意に従ふてお在なされたのであるから、シーザ將軍はそれに対して御同情を表して居られます、それ故、若し女王よりシーザ將軍に、御保護を御依頼遊ばすならば、將軍は喜んでそれに應ぜらるゝであります、願はくは、アントニイ將軍の手を離れて、シーザ將軍

の保護の下に此の埃及國を安泰に置れます様に——、と云ふのであつた。

それに對してクレオパトラは恚んなに答へた。

クレオ「妾はシーザ將軍のお手に接吻する代りに、其方の手に接吻するから何うぞシーザ將軍に爾う傳へてお呉れ、妾は、將軍の足下に、妾の王冠を置いて跪まづいて居ります、妾は、總るものを征服する其御聲で、埃及國の上に命令をお下し遊ばすのをお待ち申して居ります」

女王より此の答へを得たサイアレスは、女王の前には甚く面目を施したけれどアントニイには非常なる怒を受けた。シーザからの返答によれば、彼は一人としてアセスに殘生を送ることすらアントニイに許さぬと云ふは、猪口オな言ひ分である。

アントニイは使者に對して怒ると共に、シーザの使者を受けたクレオパトラに對しても心中甚だ平かでなかつた。

彼が女王に對して、機味の有たけを吐けるとクレオパトラは、
 クレオ「若し妾が、薄情にもシーザーに心を寄せるやうなことがありましたな
 らばそのこそ、天罰の雷に打れて、先づ妾から先に殺され、次にはシーザ
 リオ(シーザーの子)、それから順々に、他の我が兒達も殺されて、終には埃
 及の總ゆる勇士どもも、悉く同じ雷に打れて亡ぼされた上、ナイル河の蛇や
 蝮の餌食になるが可い！」

アント「それを聞いて安堵した。——明日はシーザーが此處へ討入つて來るで
 あらうから、機を制して我が海陸の兵を、一つに纏めた上、彼と雌雄を決
 しやう。あゝ我が勇猛心よ、何處へ行つて居るのだ！……クレオパトラ
 殿、若し、私が、及び戰場からかつて、貴女の唇に接吻する場合があつたな
 らば、その時こそ私の全身は、敵の血を浴びて居るぢやらう。私も、私の
 胸も、……その時こそは、名譽を受ける資格がある。——絶望することは、

少しもないのぢや、

クレオ「オ、お勇ましい事！」

アント「私は三倍の勇氣をもつて、死物狂に戦つて見やう。私はもう決心した
 のぢや、さ、互に楽しく一盃を過ぎさう、我が將士を呼んで下さい、今一度私
 の杯に酒をなみくと満して下さい、今宵一夜を飲み明し、夜半の鐘の音を
 笑つてやらう」

クレオ「今宵は妾の誕生日で御座います、妾は心計の祝を仕やうと思つて居
 りました。——けれども、貴下が以前のアントニイ様で在しやいますならば
 妾も元のクレオパトラになりませう」

アント「爾らぢや、楽しく祝はらう」

クレオ「貴下の部下を呼び寄せませう」

アント「爾らぢや、呼んで下さい、私が彼等に言はう、そして今宵は、傷口か

ら酒の泌み出るまで飲ましてやりませうぞ。——さ、女王、未だ未だ元氣はあるのぢや、此の次には、私は死の神に愛せられる程、奮戦して見やう、我が劍を、無数の人を薙ぎ取る疲病神の鎌のやうに仕て見せませうぞ」
其處へ部下の將、イノバース以下のものが入つて來た。悲壯な最後の酒宴が開かれやうと言ふのである。

『四』の一

クレオパトラの宮殿

最後の宴は未だ果てぬ、アントニイとクレオパトラの傍には、イノバースやアレキザスや、侍女どもが居られて居る。

アントニイ「皆のもの、明日こそは海陸より一時に攻め立てるのぢや、俺は活

て歸るか、さもなれば、血汐を浴びて名譽の戦死を遂げるのぢや、その名譽が俺を再び蘇らすぢやらう、其のものも勇しく戦ふであらうな」

イノバース「死物外に戦つて勝手にせよと叫んでやりませう」

アント「よく言ふた、さ、部下の者共を呼び寄せて呉れ、今宵は樂しみの限を盡さう、(三四名の従者入來る)——こりや、其方達の手を握らせい、よくも

これまで忠實に働らいて呉れた、よくも我に仕へて呉れた、そして其方達の王とも言ふべき我も、其方達と勞苦を分つたのぢやぞ、……なれど今宵限りぢや、最早其方達の勤もこれが最後ぢや、恐らく其方達は、二度と我を見ぬであらう、若し見ることがありとすれば、それは手傷を負ふた我が死骸ぢや——恐らく明日よりは、其方達も外の主取りをすることであらう、俺は、暇を取らず人々のやうに其方達を見るのぢや。——なれど、者共、其方達の主人を棄てず踏み止つて呉れ、唯二時間の間勤めて呉れ、多くとは言はぬぞ

よ、——神が必ず其方達に酬ひを賜はるであらう」
イノバ「これは將軍のお言葉とも覺えませぬ御覽なされませ、皆な泣いて居りまする、愚かな手前どもも、これ此の通り——、何卒我れ等を女童のやうになされませるな」

アント「は、は、は、其の様なつもりで言ふたのではなかつた、其の涙が落ちた所に、世の幸はしきもの、幸ひなるものが芽生るであらう、イノバーパス其方も、餘に俺を悲しませるな、俺は其方を慰さめるために言ふたのぢや。今宵一夜を飲み明さう、明日こそは、名譽ある討死よりも、勝利の歸陣こそ望ましい次第ぢや、さ、憂を棄て、酌み交さうよ——」

『四』の二
宮殿の他の一室

室にはアントニイとクレオパトラ、それに侍女のチャミアン、其他のものが居る。

アントニイは家來のエロスに對ひ、我が鎧を持って來よと命ず、するとクレオパトラは、甲しの間お暇みなくれてはと言ふ、けれどもアントニイは鎧を持って來よとエロスに急がす、間もなくエロスは鎧を持って入つて來る。
アント「こりや、エロス、其方は鎧を着せて呉れ、——若し今日、我等が好運でないとすれば、それは運命に對して抵抗ふたからぢや、さ、着せて呉れ」
クレオパトラ「妾もお手傳い申しませう」
クレオパトラが鎧を着せかけるとアントニイはそれを拒み、
クレオ「まあ、何故で御座りまする？」
アント「棄て置いて下されい我が心に勇氣を付けるのは、貴女の勧めぢやが、

鎧を着せることは、貴女の勤では御座らぬ——」

クレオ「ほんに、其の通りで御座ります」

アント「可し、可し、これで可いのぢや。こりや、鎧がよく身に着いたか？
可し、其方も早く身仕度くして参れ」

エロス「直くと仕度いたして参ります」

エロスは將軍の御前を立ち去つた、後でクレオパトラは、

クレオ「お、これは未だよく扣子が締められて居りませぬ」

アント「あのエロスめ、時稀には、未だ俺が脱いで休息み度いとも思もはぬ間
に、馳んで了ふ程、充分締め居らぬ事もある、え、このエロスめ、無様に扱

かひ居るわい、女王のお附人でも、其方よりは腕りと締め居るぢやらうに。

——さて女王、貴女は今日こそ我が武者振を御覽なさるであらう、我が花々
しい働き振りを御覽なさるであらう」

其時、一人の兵士が入つて来て言ふ。

兵士「將軍身仕度致しました一千の兵は、市の門でお出陣を御待ち受け申して

居ります」

やがて多人数の叫び聲、喇叭の音など響き、數人の將士が続いて入つて来る。

アントニイは己れの將卒に會釋して後クレオパトラに向ひ、

アント「女王、さらばですぞ！ これは武人の接吻ぢや、俺は、武士らしく別

を告げやう、さらばぢや」

アントニイはエロス以下の將士と共に出て行く。

其時侍女のチャーミアンは女王に向ひ、

チャーミー「女王様、何うぞもうお室へお退り遊ばしませい、」

クレオ「さ、連れて行つてお呉れ。アントニイ様は花々しく御出陣なされた。

あの方とシーザー將軍は、此の一戦で勝負をお決しなさるぢやらう、——そ

してアントニイ様は、屹度勝つ心算で在つしやる様ぢや、——さ、お來、——
チャーミアン。

【四】の三

イノバースの變心

今、アントニイは、これまで長年の間自分に附從て居たイノバースが、シーザー將軍に降参したと云ふ報知を聞いて、今更の様に驚きの眼を胸つて居る、けれども考へて見れば、別にこれも不思議な事でもないのであるから、アントニイは兵士に命じて、イノバースが所有して居る財寶に、町重なる手紙を添えて、シーザー陣所なるイノバースの手許に送つてやる。

* * * * *

一方シーザーの陣所では、シーザー將軍が、部將のアクリツバを呼んで、自分ではアントニイを生擒にし度い所存ぢやから、その旨を一軍の者に傳へて亂けと命じて居る、恰度其處へイノバースが入つて來て、クレオパトラの部將アレキザスが亂を謀つたことを知らせる。

やがて間もなく、一人の兵士が、アントニイより送り届け來た財寶をイノバースに持つて來てやる。それを見た時には、流石のイノバースも、アントニイの寛仁な態度に胸を打たれ、
イノバース「此の上、アントニイ將軍に對して、何うして戦が出来やう、俺は、これから自分の死場所を探しに行かう」
獨語を言ひながら、イノバースは出て行く。あゝ勇將の末路も悲惨と言ふの外はないのである。

* * * * *

アントニイが奇襲を試みた結果、敵は敗北した、アントニイは凱歌を奏して、アレキサンドリヤに引上げたのである。彼れは負傷したスカラス其他を従へて市の門に入て来た。アント「我等は、敵の陣營まで敵を討ち退けた、——誰かある、馳せて女王に我が武功を傳へよ、今日逃げ居つた腰拔共は、明日の日の暮らぬ前に、討ち果すであらう。——者共、辱けないぞ、其方達は華々しく奮戦した、それも唯だの雇人の様ではなく、己れの事の様に奮戦して、各々勇士の手本を示した。其方達、市に歸らば妻を抱き、友を懷き、戦功を自慢せよ、彼等は嬉し涙をもて、傷の血汐を洗ふであらう、名譽の傷口を接吻して、傷を癒して欠れるであらう」

アントニイの勝利を聞いた、クレオパトラは、彼を迎へて讚美の言葉を呈し、暫し兩人は幸しき過去の敗戦を忘れた心地であつた。

恰度其夜の事である、羅馬軍の兵が哨兵を仕て居る所へ、一人の男が、跪めきながらやつて来た、それは哀れなイノバマスであつた。イノバマスはアントニイに負いた事を、今更のやうに懺悔後悔した、彼はアントニイの寛仁なることを思ふに付けても、己れの非敢非道が洩問しくてならぬ。彼はアントニイの名を口にしつゝ、シーザー陣營の前で死んで了ふ。兵士達が、それと氣付いた時は、最早息の絶え果てた後であつた。

【四】の四

アントニイの憤怒

局は一轉した。

夜が明け離れたし、今のさきまで夢濃かなりアレキサンドリアの市は忽ち擾亂の巷と化したのである。

海には、羅馬の艦隊と埃及の艦隊と接近しながら、砲火をも交へず、果ては兩艦隊の兵士等互に歡呼して味方同志の如く相近き、聯合してアレキサンドリアの港口深く進んで来る。

あゝ此の光景！何事であらう！

アントニイは終に估られたのである、シーザーはクレオパトラを誘ふて、敗軍の將アントニイを死地に陥らしめたのである。

アントニイ「もう是までぢや——、此の汚はしい埃及女に估られたか、あゝ我が艦隊は敵の手に渡されて了ふたか、あれ見よ、彼等は帽を振りて、年久しく離れし友と相見る如くに騒ぎ居る——。あゝ幾度も變心せし妖婦め、あの宵二才のシーザーめに此のアントニイを估り居つたか、あゝ己の心は其方故

に、斯る戦も生て来たものを——。今は其方も唯だ憎みの目的となつた——！

こりやスカーラス、皆の者に逃げよと傳へよ、今となつては俺一人、あの妖婦奴に恨を報ゆれば可いのぢや——、もう是れまでぢや、皆の者に、逃げよと告げよ、行け、スカーラス——

負傷したスカーラスは將軍の命を承けて去つて了ふ。けれどもアントニイは狂氣の様に叫びつゝ、尙も憤懣の氣を漏して居る。

アント「あゝ、太陽よ、俺は二度とお前の日の出を見まい、「幸運」とアントニイとは別れたのぢや、別れの握手を交したのぢや——。あゝ俺は終に估れて了ふた、此の裏切り女奴！此の人魅し奴！其の女の唯だ一眼が、俺に眼をさせ居つた、其の女の唯だ一眼が、俺を戦から召び歸へし居つた！その愛は、俺れが生涯の誇りであり、俺が生涯の目的でもあつた——。それに、此奴め、穢多のやうに、俺を欺いて、どん底へ陥して了つた、こりや、エロ

ス、エロス！エロスは何うした」
 其の聲を聞いて入つて来たものはエロスではなくつて女王のクレオパトラであつた。

アント「え、え、魔女奴！消えて了へ！」
 クレオ「まア貴下は妾を妾に怒つてお在つしやいます」
 アント「消えて了へ魔女奴！さもなくば、其方の不埒に當する罰を加へてやらうぞ、——そして其方を殺して、羅馬へ引いて行かうとするシーザー奴が凱旋の土産を損じて呉れやうぞ……。シーザーに連れて行かれるならば、騒ぎ廻る平民共の觀せ物になり、世界の女の汚しのやうになつて彼れの車の後に附いて行くが可からう、僅かな小錢を貰ふて、賤しいものゝ前に、怪物の様に曝し物にされるが可からう、……恐ろしさの前に、幾度も死の苦みをするよりは、今我が憤りの手に依つて、殺された方が、まだ

しも優してあらう。いづれにせよ、魔女は殺されねばならぬ、此奴め羅馬の青二才に俺を估り居つた、その奸計にかゝつて俺は倒れたのぢや、そのために、此奴も殺されるのぢや——、こりや、エロス！」

【四】の五

女王の宮殿

アントニイの前を逃げて来たクレオパトラ女王は、慌てゝ入つて来た、後には侍女のチャームミアンにアイラス、それに宦官のマーチアンが附従て来る。クレオ「あゝ、誰れか来てお呉れ、アントニイ様は、あの希臘の勇士テラモンよりも、恐ろしう狂ふてお在なされる、一度も弱んだ事もないテツサリイの猪のやうに荒れてお在なされる」

「チヤも、早くお寮へお行でなされませ、其處に閉じ籠つて、貴女様はもうお死なされたと言ふてお遣はしたされませ」
クレオ「お寮所へ！お、それではママアアン、其方は早う行つて、妾が自害したと言ふてお呉れ、臨終の際にも、「アントニイ様」と言ふて死んだと、悲し氣に言ふてお呉れ。早うお行き、そして妾の自害を何の様に御聞きなされるか、それを知らせて呉れ——、さらば、皆のもの、お寮所へ！」

【四】の六

宮殿の他の部屋

クレオ「バトラ女王を道ひ廻はして行衛を見失なつたアントニイは、我が部下のエロスに出會つた。」

アント「エロス、其方が眼に見る此のアントニイは、幻影ではないか」

エロス「否え、將軍、その様な事は御座りませぬ」

アント「俺は時々空中に、龍や、熊や、獅子や、塔や、絶壁や、険しい山や、或は海角の突出したのを見るのぢや、それ等の物が、風に揺らるゝ枯木の梢のやうに、俺の方に頭を下る、——固よりそれ等は、唯の幻影のやうではあるが——。其方はその様なものを見掛けば仕なかつたか」

エロス「手前は見かけませぬ」

アント「愛するエロスよ、我が部下の大將共も、此の幻影のやうなものぢや。

此のアントニイとて最早以前のアントニイとして、此處に居る事は出来ぬ。俺は埃及の女王のために此の職を仕たのぢや、女王は俺のものぢやから、俺の心と女王の心は繋り合つて居ると思ふたに、女王奴、シーザーと誤魔化しの骨牌をやつて、我が勝利の譽れを敵の手に委て了ふた。なれど、泣くなエ